

Symantec pcAnywhere™ 管理者ガイド

Symantec pcAnywhere™ 管理者ガイド

本書で説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

Documentation version 12.5

商標登録

Copyright © 2008 Symantec Corporation.

All rights reserved.

政府機関ユーザーによる取得: 商用目的で本ソフトウェアをご使用される政府機関ユーザーには、標準仕様条件が適用されます。

Symantec、Symantec ロゴ、Symantec pcAnywhere、Symantec Packager、ColorScale、SpeedSend、LiveUpdate、Virtually Anywhere および Work Virtually Anywhere は Symantec Corporation または関連企業の米国およびその他の国における登録商標または商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

Apple および Mac OS は Apple Computer, Inc. の登録商標です。Java は Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。Microsoft、Windows、Windows NT、Windows Vista、MS-DOS、Windows ロゴは Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。Linux は Linus Torvalds の登録商標です。SUSE およびそのロゴは SUSE AG. の登録商標です。Red Hat およびロゴは Red Hat, Inc. の米国およびその他の国における商標です。SSH および Secure Shell は、SSH Communications Security, Inc. の商標です。その他の会社名、製品名は、各社の商標または登録商標です。

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。本書のいかなる部分も、Symantec Corporation およびそのライセンサーからの事前の文書による許諾を得ることなく、いかなる方法によっても無断で複写、複製してはならないものとします。

本書は、「現状のまま」提供されるものであり、商品価値を有すること、お客様の特定の目的にかなうこと、権利を侵害していないことに対する暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。SYMANTEC CORPORATION は、提供されるパフォーマンスまたは本書の使用に関連した偶発的または必然的な損害に対して、一切責を負わないものとします。本書の内容は、事前の通知なく、変更される可能性があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR Section 12.212 および DFARS Section 227.7202 に定義されている「commercial computer software (商用コンピュータソフトウェア)」および「commercial computer software documentation (商用コンピュータソフトウェア関連資料)」と見なされます。

目次

第 1 章	移行とアップグレードの戦略の計画	7
	移行とアップグレードについて	7
	Windows 2000/2003 Server/XP での pcAnywhere 12.1 から 12.5 への移行	8
	Windows 2000/2003 Server/XP での pcAnywhere 12.0.2 から Vista への移行	8
	Symantec Packager を使った簡単な移行とアップグレード	9
第 2 章	カスタムインストールパッケージの作成	11
	Symantec Packager について	11
	Symantec Packager でできること	12
	Symantec Packager の働き	12
	製品モジュールのインポート	14
	製品設定のカスタマイズ	14
	製品機能の選択	15
	設定ファイルを含める	17
	製品設定の整合性の実証	19
	pcAnywhere インストールへのシリアル番号の割り当て	20
	設定の全体的な管理	22
	製品インストールオプションの設定	25
	カスタムコマンドの作成	29
	インストールパッケージの作成	30
	パッケージ定義への製品とコマンドの追加	31
	製品インストールとパッケージのビルド	32
	製品設定ファイルのビルド	32
	パッケージのビルド	32
	パッケージのテスト	33
第 3 章	Symantec pcAnywhere カスタムインストールの配 備	35
	配備について	35
	パッケージインストールファイルの場所について	36
	Web ベースのインストールを使ったインストールパッケージの配備	37
	Web ベースのインストールの必要条件について	37

インストール Web サーバーの設定	38
配備ファイルのカスタマイズ	41
Web サーバー上のインストールのテスト	45
ユーザーへのダウンロード場所の通知	45
SMS 2.0 を使った pcAnywhere の配備	46
SMS による配備の最小必要条件	47
SMS による配備	47
Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ログオンスクリプトを使う	49
Windows サーバーの設定	50
Windows ログオンスクリプトの作成	50
Windows ログオンスクリプトのテスト	51
NetWare ログオンスクリプトを使う	52
Novell NetWare サーバーの設定	52
NetWare ログオンスクリプトの作成	52
NetWare ログオンスクリプトのテスト	54

第 4 章

集中型管理の実行	55
集中型管理について	55
pcAnywhere ホストのリモート管理	55
pcAnywhere Host Administrator ツールのインストール	56
MMC への Host Administrator スナップインの追加	57
設定グループの作成	58
設定グループへのコンピュータの追加	58
管理者のホスト接続項目とリモート接続項目の設定	58
pcAnywhere Host Administrator でのホスト項目の設定	61
pcAnywhere 設定ファイルの配布	61
設定グループでのホストの管理	62
Microsoft 社の SMS との統合	62
SMS へのパッケージ定義ファイルのインポート	63
Microsoft DCOM について	63
Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista での DCOM の実 装	64
DCOM 設定の修正	64
AwShim について	64
集中型ログ記録について	65
SNMP トラップを使った処理効率の監視	66
pcAnywhere MIB ファイルについて	66

第 5 章

pcAnywhere とディレクトリサービスの統合	67
ディレクトリサービスについて	67
pcAnywhere でのディレクトリサービスの使い方	67
ディレクトリサーバーの設定	68

LDAP サーバーの設定	68
Windows Active Directory の設定	68
ディレクトリサービスを使うための pcAnywhere の設定	72
pcAnywhere でのディレクトリサービスの設定	72
ディレクトリサービスを使うためのホストコンピュータの設定	73
ディレクトリサービスを使うためのリモートコンピュータの設定	74
第 6 章	
Symantec pcAnywhere でのセキュリティの管理	75
pcAnywhere ホストへのアクセスの制御	75
特定のコンピュータ名または IP アドレスに接続を限定する	76
pcAnywhere での集中型認証の活用	77
セッションセキュリティの保護	80
Windows Vista/Server 2008 で公開キー暗号化を使う pcAnywhere の設定	82
監査証跡の保守	82
ポリシーベースの管理の実装	83
Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista でのグループポリシー の実装	83
pcAnywhere 管理用テンプレートのインポート	83
ユーザーポリシーの管理	84
索引	89

移行とアップグレードの戦略 の計画

この章では以下の項目について説明しています。

- [移行とアップグレードについて](#)
- [Symantec Packager を使った簡単な移行とアップグレード](#)

移行とアップグレードについて

Symantec pcAnywhere はバージョン 12.0.x から 12.5 への移行を Windows 2000/2003/XP/Vista でサポートします。移行中、pcAnywhere は以前の製品バージョンに上書きインストールしてユーザー定義の設定を保存できます。

Vista では移行とアップグレードでシステムの再起動が要求されますが、Windows 2000/2003/XP ではシステムファイルを更新する必要がある場合のみ要求されます。

Symantec Packager では以前のバージョンをアンインストールする処理または事前定義済みの設定を複数のユーザーに配布する処理が簡単にできます。

p.9 の「[Symantec Packager を使った簡単な移行とアップグレード](#)」を参照してください。

移行とアップグレードの戦略を計画するときの参照情報を表 1-1 に示します。

表 1-1 移行とアップグレードの対応表

Symantec pcAnywhere の バージョン	オペレーティング システム	再起動	データの自動保存
12.0	Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista	あり (Vista)	ホスト項目 呼び出し側項目 リモート項目 オプションセット レジストリ設定 AutoTransfer ファイル (変換が 必要) シリアル ID セット
12.1	Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista	あり (Vista)	ホスト項目 呼び出し側項目 リモート項目 オプションセット レジストリ設定 AutoTransfer ファイル (変換が 必要) シリアル ID セット

Windows 2000/2003 Server/XP での pcAnywhere 12.1 から 12.5 への
移行

Symantec pcAnywhere は Windows 2000/20003 Server/XP ではコンプリート版とホ
ストのみ版の pcAnywhere 12.1 からバージョン 12.5 への完全移行をサポートします。

インストール中、既存の設定を残すかどうかを確認するメッセージが表示されます。この
データにはホスト項目、リモート項目、呼び出し側項目とオプションセットの設定が含まれ
ます。

リモートのみパッケージと整合性検査済みパッケージの移行はサポートされません。

Windows 2000/2003 Server/XP での pcAnywhere 12.0.2 から Vista へ
の移行

Symantec pcAnywhere は Windows 2000/2003/XP ではコンプリート版とホストのみ
版の pcAnywhere 12.0.2 からバージョン 12.1 への完全移行をサポートします。XP から

Vista へアップグレードする場合は、Vista へアップグレードしてから pcAnywhere 12.1 へアップグレードするか、またはその逆でも構いません。

インストール中、既存の設定を残すかどうかを確認するメッセージが表示されます。このデータにはホスト項目、リモート項目、呼び出し側項目とオプションセットの設定が含まれます。

リモートのみパッケージと整合性検査済みパッケージの移行はサポートされません。

Symantec Packager を使った簡単な移行とアップグレード

Symantec Packager はインストール先システムに配布するカスタムインストールパッケージを作成、修正、ビルドできる管理者ツールです。Symantec Packager はダウンロード可能です。

Symantec Packager では以前のバージョンの pcAnywhere から移行またアップグレードする処理を次の方法で簡単にできます。

製品インストールのとき、以前のバージョンの製品を手動でアンインストールする必要がある	製品のインストール前に以前のバージョンをサイレントにアンインストールするカスタムコマンドを含むカスタムインストールパッケージを作成します。
製品インストールのとき、インストール処理を完了するためにコンピュータを再起動する必要がある	製品インストール用のカスタムインストールパッケージを作成して受動モードまたはサイレントモードでインストールするようにパッケージを設定します。
製品インストールは事前設定済み製品設定の保存をサポートしない	必要な設定が入った事前設定済みデータファイルを含むカスタムインストールパッケージを作成します。

p.9 の「[Symantec Packager を使った簡単な移行とアップグレード](#)」を参照してください。

カスタムインストールパッケージの作成

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec Packager](#) について
- [Symantec Packager](#) でできること
- [Symantec Packager](#) の働き
- 製品モジュールのインポート
- 製品設定のカスタマイズ
- カスタムコマンドの作成
- インストールパッケージの作成
- 製品インストールとパッケージのビルド
- パッケージのテスト

Symantec Packager について

Symantec Packager を使うとインストール先システムに配布可能なカスタムインストールパッケージの作成、修正、ビルドができます。Symantec Packager を使ってユーザーに必要な機能と設定のみが入っているパッケージをビルドすることによって社内環境に合わせてインストールをカスタマイズできます。

インストールパッケージに含まれるシマンテック製品は著作権法とシマンテック社の使用許諾契約により保護されます。パッケージの配布にはそのパッケージをインストールするユーザーごとにライセンスが必要です。

メモ: Symantec Packager は Windows 2000/2003 Server/XP Professional/Vista でのみ動作します。

Symantec Packager でのこと

Symantec Packager では次のことができます。

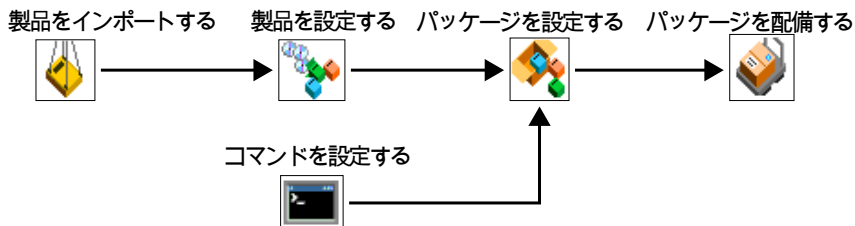
- すべての機能に対するフルアクセスをユーザーに与えるか必要に応じてアクセス権を制限することでセキュリティポリシーに従って製品をカスタマイズする
- ユーザーに必要な機能のみが入っているカスタムインストールパッケージを作成して配備の帯域幅とアプリケーション容量を減らす
- 事前設定済みのデータファイルを含めてインストールの複雑さを減らす
- 一度に複数の製品をインストールして配備費用と複雑さを最小限にする
- カスタムコマンドを製品インストールと一緒に含めることによりアプリケーションの配備と移行を簡単にする

Symantec Packager の働き

Symantec Packager はカスタムインストールパッケージの作成に段階を踏む手法を使います。それぞれの段階はその直前の段階の出力に依存します。

Symantec Packager でカスタムインストールパッケージを作成する処理を図 2-1 に示します。

図 2-1 Symantec Packager の段階の概要



パッケージを作成する処理の概略を表 2-1 に示します。

表 2-1 パッケージ作成処理

タスク	説明
製品モジュールを Symantec Packager にインポートする	製品モジュールには製品のカスタムインストールを作成するのに必要なインストールバイナリファイルと製品テンプレートファイルが含まれます。 p.14 の「製品モジュールのインポート」を参照してください。
製品を設定する	ユーザーに持たせたい機能の選択、事前設定済みのデータと設定ファイルの追加、各製品へのデフォルトインストールオプションの設定ができます。 p.14 の「製品設定のカスタマイズ」を参照してください。
パッケージに含めたいコマンドを設定する	カスタムコマンドでは他社のプログラムやバッチファイルを含めるなど、製品テンプレートでサポートされない機能の追加ができます。 p.29 の「カスタムコマンドの作成」を参照してください。
パッケージを設定する	1 つのパッケージで 1 つ以上の製品設定とカスタムコマンドをバンドルできます。パッケージのインストールオプション、製品インストールの順序などを設定してパッケージをさらにカスタマイズできます。 p.30 の「インストールパッケージの作成」を参照してください。
カスタム製品またはパッケージをビルドする	パッケージをビルドすると指定した製品、コマンド、パッケージオプションを取り入れたインストールファイルが作成されます。 Symantec Packager では代わりに製品設定ファイルをビルドすることもでき、その場合は単一製品インストール用の .msi ファイルが作成されます。 p.32 の「製品インストールとパッケージのビルド」を参照してください。
パッケージをテストする	パッケージはエンドユーザーに配備する前にテストして正しい機能性を保証する必要があります。 p.33 の「パッケージのテスト」を参照してください。
パッケージを配備する	[パッケージの配備]ページには作成したパッケージが含まれそのパッケージをユーザーに配備できます。シマンテック社では Symantec Packager にパッケージ配備ツール、Symantec pcAnywhere CD に Web ベースの配備ツールを用意しています。現在お使いの他社の配備ツールも使えます。 p.35 の「配備について」を参照してください。

製品モジュールのインポート

製品モジュールはパッケージを作成するための基本要素です。製品モジュールから製品テンプレートと製品インストールバイナリファイルが抽出されます。製品テンプレートは機能の必要条件と競合の詳細を示し、製品のカスタムインストールを作成できるようにします。インストール中、Symantec Packager は Packager¥Products フォルダで製品モジュールファイルの有無を自動的に調べ、あれば自動的にインポートします。

Symantec Packager を開いたときに[製品のインポート]ページに製品が何も表示されない場合には製品モジュールを手動でインポートする必要があります。

製品モジュールをインポートするには

- 1 Symantec Packager を開きます。
- 2 Symantec Packager ウィンドウの[製品のインポート]ページのファイルメニューで[新しい製品のインポート]を選択します。
- 3 [ファイルを開く]ダイアログボックスでインポートしたい製品モジュールが入っているフォルダに移動します。
- 4 製品モジュールを選択してから[開く]をクリックします。

Symantec Packager は製品モジュールをインポートして[製品のインポート]ページに戻ります。製品モジュールのサイズと複雑さによっては登録処理に時間が長くなる場合があります。

Windows Vista で Symantec Packager を実行する場合は、12.1 以前のバージョンからの .pmi ファイルをインポートできませんが、XP で Symantec Packager を実行する場合はインポートできます。

製品設定のカスタマイズ

Symantec Packager にインポートする製品モジュールごとにデフォルトの製品設定ファイル(.pcg)が作成されます。各製品設定ファイルにはその製品に含めたい機能、インストールオプション、事前設定済みのデータが含まれます。Symantec Packagerはこの情報を使ってインストールパッケージを構築します。デフォルトの製品設定ファイルを編集することも新しく作成することもできます。

デフォルトの pcAnywhere 製品設定ファイルで利用可能な設定オプションについての情報を表 2-2 に示します。

表 2-2 Symantec pcAnywhere の製品設定オプション

ページ	設定
[機能]	pcAnywhere では次の機能をカスタマイズできます。 ■ ユーザーインターフェース (pcAnywhere マネージャ) ■ リモートコンポーネント ■ ホストコンポーネント ■ 通信プロトコル ■ マニュアル (オンラインマニュアルとヘルプ) ■ Symantec インストールユーティリティ
[設定ファイル]	pcAnywhere の製品テンプレートにはパッケージまたはカスタム製品をインストールした後で設定できるデフォルトのリモート設定項目とホスト設定項目が入っています。 pcAnywhere で作成する設定ファイルをパッケージまたはカスタム製品設定に追加してさらにカスタマイズできます。
[インストールオプション]	pcAnywhere では次の製品インストールオプションをカスタマイズできます。 ■ [製品の説明] ■ [インストール先の場所] ■ [テンプレートとして使うホストオブジェクト] ■ [Windows の起動時に起動するホストオブジェクト] ■ [テンプレートとして使うリモートオブジェクト] ■ [インストール後に LiveUpdate を実行] ■ [既存の設定を保存]

カスタム製品に含める製品機能、インストールオプション、省略可能な設定ファイルを選択した後でカスタム製品をテスト目的でビルドできます。製品設定ファイルをビルドすると .msi ファイルが作成されます。Symantec Packager は pcAnywhere .msi および .exe ファイルのインストールをサポートします。

p.32 の「製品設定ファイルのビルド」を参照してください。

製品機能の選択

Symantec Packager では必要な機能を含め不要な機能を削除することによって製品インストールをカスタマイズできます。製品サイズとインストールサイズは選択する機能によって変わります。

pcAnywhere の一部の機能は他のコンポーネントと依存関係があります。Symantec Packager にはあるレベルまで組み込みの依存関係検査機能がありますが、すべての必須ファイルは含まない pcAnywhere インストールパッケージをビルドすることもできます。

パッケージに含めるまたはパッケージから除外する製品機能を選択したときに製品エディタウィンドウの[機能]ページに表示される機能の説明を読んでください。機能の説明は機能の依存関係についての情報です。

製品の主要な依存関係の一部を表 2-3 に示します。

表 2-3 Symantec pcAnywhere 製品の依存関係

機能	依存関係
pcAnywhere マネージャ	ユーザーに設定の修正を許可したい場合に必要です。 整合性管理を含めたい場合は pcAnywhere マネージャ を除外します。
リモート	少なくとも 1 つの通信プロトコルが必要です。
ホスト	コンピュータの起動時にホストが自動的に起動するように製品を設定する場合は呼び出し側設定ファイル(.cif)が必要です。 少なくとも 1 つの認証の種類が必要です。 少なくとも 1 つの通信プロトコルが必要です。
リモート制御	すべてのカスタム製品インストールに必要です。
ファイル転送	少なくとも 1 つの通信プロトコルが必要です。
リモート管理	少なくとも 1 つの通信プロトコルが必要です。
チャット	少なくとも 1 つの通信プロトコルが必要です。
認証	すべてのカスタム製品インストールに必要です。
通信プロトコル	すべてのカスタム製品インストールに必要です。

製品機能を選択するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
- 新規の製品設定を作成します。

■ 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[機能]ページで次のいずれかの操作をします。
- カスタム製品に含めたい製品機能を選択します。

■ 含めたくない機能を選択解除します。

■ 下位機能を選択または削除するために機能の左にある正符号(+)をクリックします。

3 次のいずれかを選択します。

[OK]	変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じます。
[適用]	変更内容を保存して製品設定を続行します。

4 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

設定ファイルを含める

Symantec Packager ではインストール中またはインストール後にユーザーが設定変更を加える必要がないように事前設定済みのデータまたは設定ファイルを含めることができます。製品別の設定の場合は製品でこの設定ファイルを最初に設定してから Symantec Packager の[設定ファイル]ページに追加する必要があります。Symantec Packager では設定ファイルの編集はできません。

詳しくは Symantec Packager のヘルプを参照してください。

pcAnywhere の製品テンプレートは[機能]ページで選択された機能に応じて次のデフォルト設定ファイルを用意します。

Symantec LiveUpdate ファイル (LIVEUPDT.HST)	pcAnywhere のバージョンに対応した製品の自動的な更新版を受信するためにシマンテック社の LiveUpdate サーバーに接続するのに必要な情報があります。
リモート接続項目ファイル(.chf)	モデム接続、ネットワーク接続、直接接続によるホストコンピュータとの接続をサポートするデフォルト設定があります。ファイル転送モードまたはリモート管理モードで接続を開始するためのデフォルト設定もあります。
ホスト接続項目ファイル(.bhf)	モデム接続、ネットワーク接続、直接接続でコンピュータに接続するのをリモートユーザーに許可するデフォルト設定があります。

[機能]ページで選択した機能に応じて pcAnywhere で次のファイルを設定してカスタム製品インストールに追加できます。

オプションセット	特有の設定条件に対応するために pcAnywhere の全体オプションを設定できます。
ホストセキュリティ ID	pcAnywhere インストールにシリアル番号を割り当てることができます。

リモート接続項目ファイル(.chf)	別のコンピュータにリモート接続するのに必要な接続とセキュリティの情報を事前設定できます。 詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。
コマンドキューファイル	ファイル転送、コマンドライン、セッションの終了のタスクをオートメーション化できます。 詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。
ホスト接続項目ファイル(.bhf)	別のコンピュータからの接続を許可するのに必要な接続とセキュリティの情報を事前設定できます。 詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。
呼び出し側ファイル(.cif)	ホストコンピュータに接続するユーザーのためのログオンアカウントを事前設定し、ユーザーの ID を確認するための認証方法を選択できます。この情報はホストの起動に必要です。 詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

Symantec pcAnywhere の設定ファイルは次の場所にあります。

Windows 2000/XP/Server 2003	¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥Symantec¥pcAnywhere
Vista	¥Users¥LoggedinUser¥Documents¥Packager

デフォルトでは設定ファイルのフォルダはオペレーティングシステムで隠し属性になります。pcAnywhere の設定ファイルを参照するには隠しファイルを表示するようにオペレーティングシステムでフォルダオプションを編集する必要があります。

一定の pcAnywhere 設定を制御するためにレジストリキーファイルを追加することもできます。このファイルに含まれるレジストリキーはパッケージまたはカスタム製品をインストールするとインストール先コンピュータのシステムレジストリに追加されます。

警告: レジストリキーファイルを設定するときは注意してください。不正な設定をするとオペレーティングシステムまたは製品が動作不能になることがあります。

設定ファイルを含めるには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。

- 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[設定ファイル]ページで次のいずれかの操作をします。
- 追加したい事前設定済みのファイルの種類を選択してから[追加]をクリックします。
 - 含めたい設定ファイルを参照してから[開く]をクリックします。Symantec pcAnywhere の設定ファイルがリストに追加されます。他の種類の設定ファイルの場合はこれでデフォルトファイルが事前設定済みのファイルで置き換えられます。
 - 削除したいファイルを選択してから[削除]をクリックします。
これで事前設定済みのファイルが削除されて、付属のデフォルトファイルがある場合はそれで置き換えられます。
- 3 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
- 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。
 - 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 4 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

製品設定の整合性の実証

整合性管理を使うことによってインストールした製品への権限のない変更を防止できます。インストール済みの整合性が実証されたパッケージで **pcAnywhere** の実行可能ファイル、レジストリ、設定ファイルに変更があったことを検出すると **pcAnywhere** は実行されません。

整合性管理を使う場合には **pcAnywhere** マネージャと **LiveUpdate** の機能を除外する必要があります。整合性が実証されたパッケージをインストールするとユーザーは **LiveUpdate** を使ったソフトウェアアップグレードのインストールを含むいずれの方法によっても **pcAnywhere** を変更または更新することが制限されます。更新版が必要な場合には新しいパッケージを作成して配備する必要があります。

レジストリの変更またはファイルの追加、削除などの整合性違反は結果としてサービス拒否になることがあります。整合性管理はオペレーティングシステムの固定化など、ポリシー管理や強力な総合セキュリティの方法と組み合わせて使ってください。

p.83 の「[ポリシーベースの管理の実装](#)」を参照してください。

製品設定の整合性を実証するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。

- 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
 - 2 製品エディタウィンドウの[機能]ページで[Symantec インストールユーティリティ]の左にある正符号(+)をクリックしてリストを展開します。
 - 3 [整合性管理]を選択します。
 - 4 製品に含めたい他の機能を選択し、除外したい他の機能を選択解除します。
 - 5 [インストールオプション]ページで使いたい製品インストールオプションを選択します。
- p.25の「製品インストールオプションの設定」を参照してください。
- 6 次のいずれかの操作をします。

[OK] 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じます。

[適用] 変更内容を保存して製品設定を続行します。

- 7 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。
 - 8 次のいずれかの操作をします。
 - 製品をビルドします。
製品設定ファイルをビルドすると単一製品を含む.msiファイルが作成されます。
 - 製品を含むパッケージを作成してからそのパッケージをビルドします。
パッケージをビルドすると自己解凍実行可能ファイル(.exe)が作成されます。
- p.32の「製品インストールとパッケージのビルド」を参照してください。

pcAnywhere インストールへのシリアル番号の割り当て

Symantec pcAnywhere ではセキュリティコードつまりシリアル ID を埋め込んだカスタムインストールパッケージを作成できます。接続するためにはこのシリアル ID 番号がホストコンピュータとリモートコンピュータの両方に存在する必要があります。

シリアル番号の割り当ては次の処理を含みます。

- pcAnywhere でシリアル ID ファイル(.SID)を生成する
- 含めたい機能コンポーネントをSymantec Packagerの製品設定エディタで選択してからシリアル ID 設定ファイルを追加する
- パッケージをビルドする
- パッケージを配備してインストールする

シリアル ID ファイルの生成

Symantec pcAnywhere ではカスタムインストールに埋め込むことができるセキュリティコード、つまりシリアル ID を生成できます。シリアル ID は 0 から 4,294,967,296 までの数値にする必要があります。

異なるシリアル ID を使う 1 台以上のホストコンピュータにリモートユーザーが接続するのを許可するには、各ホストコンピュータのシリアル ID をシリアル ID ファイルに含めます。

シリアル ID ファイルを生成するには

- 1 **pcAnywhere** マネージャウィンドウの左のナビゲーションバーで[シリアル ID セット]をクリックします。
- 2 ファイルメニューで[新しい項目]、[拡張]の順に選択します。
- 3 [シリアル ID セットのプロパティ]ダイアログボックスの[次のシリアル ID を使ってホスト接続を限定する]に使いたいシリアル ID 番号を入力します。
シリアル ID は 0 から 4,294,967,296 までの数値にする必要があります。
- 4 [追加]をクリックします。
- 5 [OK]をクリックします。
右ペインの[シリアル ID セット]の下にシリアル ID ファイルが追加されます。

シリアル番号を割り当てたインストールファイルの作成

シリアル番号を割り当てた **pcAnywhere** を作成するには **pcAnywhere** で生成するシリアル ID ファイルを **Symantec Packager** で製品定義ファイルに追加します。シリアル ID は製品定義を含むパッケージをビルドするときまたは製品をビルドするときに製品に埋め込まれます。

カスタム製品インストールまたはパッケージはホストコンピュータとリモートコンピュータにインストールします。ホストコンピュータとリモートコンピュータ間の接続を許可するには両方のコンピュータでシリアル ID が一致する必要があります。

シリアル番号を割り当てたインストールファイル作成するには

- 1 **Symantec Packager** ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[機能]ページで次のいずれかの操作をします。
 - カスタム製品に含めたい製品機能にチェックマークを付けます。
 - 含めたくない機能のチェックマークをはずします。

- 下位機能を選択または削除するために機能の左にある正符号(+)をクリックします。

ホスト機能とリモート機能を含むカスタム製品インストールまたはパッケージを設定するには[ホスト]と[リモート]を選択します。別々のインストールを作成するには[ホスト]または[リモート]のみを選択します。

- 3 [設定ファイル]ページで[ホストセキュリティ ID ファイル(*.SID)]を選択してから[追加]をクリックします。
- 4 **pcAnywhere** で生成したシリアル ID ファイル(*.SID)を含むフォルダを参照してファイルを選択してから[開く]をクリックします。
データと設定ファイルのリストにシリアル ID ファイルが追加されます。
- 5 [インストールオプション]ページで使いたい製品インストールオプションを選択します。
p.25 の「製品インストールオプションの設定」を参照してください。
- 6 次のいずれかの操作をします。

[OK] 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じます。

[適用] 変更内容を保存して製品設定を続行します。

- 7 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。
- 8 次のいずれかの操作をします。

- 製品をビルドします。
製品設定ファイルをビルドすると単一製品を含む .msi ファイルが作成されます。
- 製品を含むパッケージを作成してからそのパッケージをビルドします。
パッケージをビルドすると自己解凍実行可能ファイル(.exe)が作成されます。

p.32 の「製品インストールとパッケージのビルド」を参照してください。

設定の全体的な管理

Symantec pcAnywhere のオプションセットを使うとホスト接続とリモート接続、ファイル転送、ログ記録などの機能について全体の設定を管理して処理速度の向上、セキュリティの強化、接続の管理ができます。Symantec pcAnywhere では特有の設定条件に対応するために複数のオプションセットを作成できます。

Symantec Packager で作成したカスタムインストールパッケージに事前設定済みのオプションセットを使えます。このオプションセットはローカルコンピュータのデフォルトの環境設定としても使えます。

pcAnywhere でのオプションセットの設定

Symantec pcAnywhere ではページごとにオプションセットプロパティがグループ化されています。

利用可能なプロパティを表 2-4 に示します。

表 2-4 Symantec pcAnywhere のオプションセットプロパティ

ページ	説明
[ホスト操作]	ホスト名と記録の設定などの基本的なホスト操作を制御します。
[リモート操作]	リモートセッションの処理効率と表示の設定を制御します。
[ホスト通信]	ホストコンピュータでのモデム接続とネットワーク接続のカスタマイズオプションがあります。
[リモート通信]	リモートコンピュータでのモデム接続とネットワーク接続のカスタマイズオプションがあります。
[セッションマネージャ]	リモートデスクトップの使用不能部分の背景色など、基本的なセッションオプションを制御します。コマンド入力要求除外リストの表示または編集ができます。
[ファイル転送]	ファイル転送の設定を制御します。
[イベントログ記録]	チャットのログ記録など、pcAnywhere セッション中に起きるイベントのログ記録を有効にします。
[ディレクトリサービス]	ディレクトリサービスを使ってホストを検索するための設定を制御します。
[リモート印刷]	リモート印刷の設定があります。
[暗号]	公開キー暗号化に必要な証明書情報を指定します。

pcAnywhere でオプションセットを設定するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウの左のナビゲーションバーで[オプションセット]をクリックします。
- 2 次のいずれかの操作をします。
 - 新しいオプションセットを作成するにはファイルメニューで[新しい項目]、[拡張]の順に選択します。
 - 既存のオプションセットを修正するには右ペインでオプションセットを右クリックしてから[プロパティ]を選択します。

Windows Vista では、この処理の承認を求めるメッセージが表示される場合があります。組み込み管理者アカウントにログオンしている場合、このメッセージは表示されません。

- 3 オプションセットプロパティウィンドウで左右の矢印をクリックしてページのリストをスクロールします。

p.23 の 表 2-4 を参照してください。

- 4 使いたい設定をします。
- 5 設定が終わったら[OK]をクリックします。

機能について詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

カスタムインストールファイルへのオプションセットの追加

pcAnywhere で作成したオプションセットはカスタムインストールファイルに追加できます。パッケージまたはカスタム製品をインストール先コンピュータにインストールした後でオプションセットをローカルコンピュータに適用できます。

カスタムインストールファイルにオプションセットを追加するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[設定ファイル]ページで[オプションセットファイル(*.OPT)]を選択してから[追加]をクリックします。
- 3 pcAnywhere で作成したオプションセットファイル(*.opt)を含むフォルダを参照し、使いたいファイルを選択してから[開く]をクリックします。

データと設定ファイルのリストにオプションセットファイルが追加されます。
- 4 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。
 - 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 5 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

ローカルコンピュータへのオプションセットの適用

Symantec pcAnywhere では特有の設定条件に対応するために複数のオプションセットファイルを保守できます。たとえば、異なる場所で作業するときに場所を変えるたびにデフォルト設定を変更する手間を省くことができます。場所ごとにオプションセットを作成し

て到着時にそれを適用します。オプションセットをローカルコンピュータに適用すると **pcAnywhere** のデフォルトの環境設定が上書きされます。

ローカルコンピュータにオプションセットを適用するには

- 1 **pcAnywhere** マネージャウィンドウの左のナビゲーションバーで[オプションセット]をクリックします。
- 2 右ペインで使いたいオプションセットファイルを右クリックしてから[ローカルシステムに適用]を選択します。

製品インストールオプションの設定

Symantec Packager で指定できる製品インストールオプションは製品や製品設定で含めた機能によって変わります。

パッケージレベルで制御できる他のインストールオプションがあります。これにはインストールモード、再起動、ログ記録、ロールバックなどの各オプションがあります。

詳しくは **Symantec Packager** のヘルプを参照してください。

Symantec pcAnywhere では次のインストールオプションをカスタマイズできます。

説明	製品に固有の説明を指定できます。
[インストール先の場所]	インストール先コンピュータで製品をインストールしたいフォルダを選択できます。 p.26の「インストール先のディレクトリの変更」を参照してください。
[テンプレートとして使うホストオブジェクト]	インストール後にユーザーが作成する新規のホスト接続項目のテンプレートとして使いたいホスト設定ファイルを選択できます。 p.26の「ホスト接続のデフォルトテンプレートの選択」を参照してください。
[Windows の起動時に起動するホストオブジェクト]	インストール先コンピュータでユーザーが Windows を起動したときに自動的に起動するホスト接続項目を選択できます。 p.26の「ホスト接続のデフォルトテンプレートの選択」を参照してください。
[テンプレートとして使うリモートオブジェクト]	インストール後にユーザーが作成する新規のリモート接続項目のテンプレートとして使いたいリモート設定ファイルを選択できます。 p.27の「リモート接続のデフォルトテンプレートの選択」を参照してください。

[インストール後に LiveUpdate を実行] 製品の更新版をダウンロードするためにシマンテック社の LiveUpdate サーバーに自動的に接続するようにカスタムインストールを設定できます。

p.28 の「製品の更新」を参照してください。

[既存の設定を保存] 以前のバージョンの pcAnywhere に上書きインストールする場合に既存の設定を保存するように製品を設定できます。

インストール先のディレクトリの変更

Symantec Packager で作成した Symantec pcAnywhere カスタムインストールはデフォルトでは Program Files ディレクトリの Symantec¥pcAnywhere にインストールされます。異なるディレクトリを指定できます。

インストール先のディレクトリを変更するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[インストールオプション]ページで[インストール先の場所]をダブルクリックします。
- 3 [インストール先の場所]ダイアログボックスで次のいずれかを選択します。
 - [Program Files ディレクトリ]
 - [システムドライブのルート]
 - [カスタムパス]
- 4 [フォルダ指定]で製品をインストールしたい場所の絶対パスを入力します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。
 - 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 7 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

ホスト接続のデフォルトテンプレートの選択

Symantec Packager ではインストール後にユーザーが作成する新規のホスト接続項目のテンプレートとして使いたいホスト設定ファイルを選択できます。ホスト接続項目にはリ

モートユーザーがホストコンピュータに接続するのを許可するために必要な設定が含まれます。

pcAnywhere のプログラムデフォルト設定の選択、pcAnywhere の事前設定済みホスト接続項目の選択、ユーザーが指定するホスト接続項目の選択ができます。

ホスト接続のデフォルトテンプレートを選択するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[インストールオプション]ページで[テンプレートとして使うホストオブジェクト]をダブルクリックします。
- 3 [テンプレートとして使うホストオブジェクト]ダイアログボックスの[値]でテンプレートとして使いたいホスト接続項目ファイル(.chf)を選択します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 ユーザーが Windows を起動したときにホストが自動的に起動するように製品を設定したい場合は製品エディタウィンドウの[インストールオプション]ページで[Windows の起動時に起動するホストオブジェクト]をダブルクリックします。
- 6 [Windows の起動時に起動するホストオブジェクト]ダイアログボックスの[値]で使いたい.bhf ファイルを選択します。
- 7 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。
 - 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 8 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

リモート接続のデフォルトテンプレートの選択

Symantec Packager ではインストール後にユーザーが作成する新規のリモート接続項目のテンプレートとして使いたいリモート設定ファイルを選択できます。リモート接続項目には別のコンピュータにリモート接続するために必要な設定が含まれます。

pcAnywhere のプログラムデフォルト設定の選択、pcAnywhere の事前設定済みリモート接続項目の選択、ユーザーが指定するリモート接続項目の選択ができます。

リモート接続のデフォルトテンプレートを選択するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。

- 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[インストールオプション]ページで[テンプレートとして使うリモートオブジェクト]をダブルクリックします。
- 3 [テンプレートとして使うリモートオブジェクト]ダイアログボックスの[値]でテンプレートとして使いたいリモート接続項目のファイル(.bhf)を選択します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。
 - 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 6 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

製品の更新

製品設定に **LiveUpdate** 機能を含める場合には製品の更新版をダウンロードするためにインストール後にシマンテック社の **LiveUpdate** サーバーに自動的に接続するように **Symantec Packager** で製品を設定できます。

ネットワークの **LiveUpdate** 動作を管理するために **Symantec LiveUpdate** 管理ユーティリティをインストールした場合にはネットワーク上の **LiveUpdate** サーバーに接続するように製品を設定できます。**LiveUpdate** サーバーの場所を含めるために **LiveUpdate** 設定ファイル (LIVEUPDT.HST) をカスタマイズする必要があります。

詳しくは **LiveUpdate** のマニュアルを参照してください。

製品を更新するには

- 1 **Symantec Packager** ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[インストールオプション]ページで[インストール後に **LiveUpdate** を実行]をダブルクリックします。
- 3 [インストール後に **LiveUpdate** を実行]ダイアログボックスで[インストール後に **LiveUpdate** を実行]を選択します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。

- 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 6 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

既存の設定を保存

既存のバージョン(バージョン 10.0 以降)の **pcAnywhere** にパッケージを上書きインストールする場合、**Symantec Packager** を使って既存のレジストリ、ホスト、リモート、呼び出し側の設定を保存できます。

このオプションはサイレントモードとパッシブモードのインストールでのみ利用できます。パッケージレベルでインストールモードを設定する必要があります。

p.30 の「[インストールパッケージの作成](#)」を参照してください。

既存の設定を保存するには

- 1 **Symantec Packager** ウィンドウの[製品の設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規の製品設定を作成します。
 - 編集するために既存の製品をダブルクリックします。
- 2 製品エディタウィンドウの[インストールオプション]ページで[既存の設定を保存]をダブルクリックします。
- 3 [既存の設定を保存]ウィンドウで[既存の設定を保存]にチェックマークを付けます。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 製品エディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存して製品エディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。
 - 変更内容を保存して製品設定を続行するために[適用]をクリックします。
- 6 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

カスタムコマンドの作成

カスタム製品を作成するほかにパッケージに入れるカスタムコマンドを作成できます。カスタムコマンドの例を挙げるとバッチファイル、他社の実行可能ファイル、コマンドライン引数、単純なファイルコピーがあります。カスタムコマンドを使うと複数のタスクを1つのパッケージに入れることによってアプリケーションの配備が簡単にできます。いったん定義するとカスタムコマンドは異なるパッケージで再利用できます。

カスタムコマンドを作成すると**Symantec Packager**によってコマンド設定ファイルが作成されます。コマンド設定ファイルは製品テンプレートファイルを参照しない一般的な製品設定ファイルです。このためカスタムコマンドでは製品モジュールのインポートが必要ありません。カスタムコマンドのビルド処理ではパッケージに含める前にテストできる自己解凍

実行可能ファイル(.exe)が作成されます。Symantec pcAnywhere のパッケージではカスタムコマンドは必要ありません。

カスタムコマンドについて詳しくは Symantec Packager のヘルプを参照してください。

カスタムコマンドを作成するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページのファイルメニューで[新しいカスタムコマンド]を選択します。
- 2 コマンドエディタウィンドウの[パラメータ]ページで[説明]をダブルクリックします。
- 3 [コマンドの説明]ダイアログボックスで後で簡単に識別できるようにコマンドの説明を入力します。

次に例を示します。

「ユーザーとの対話なしで pcAnywhere 9.0 をアンインストール」

- 4 [OK]をクリックします。
- 5 コマンドエディタウィンドウの[パラメータ]ページで[コマンドライン]をダブルクリックします。
- 6 [コマンドライン指定]ダイアログボックスの[コマンドラインとスイッチ]でコマンドの実行に必要なコマンドライン引数とスイッチを入力します。

たとえば、ユーザーとの対話なしで pcAnywhere 9.0 のアンインストールプログラムを実行するには pcAnywhere 9.0 のプログラムフォルダにある remove.exe ファイルの完全修飾パスに続けて /s スイッチを入力します。次に例を示します。

"C:¥Program Files¥Symantec¥pcAnywhere¥remove.exe" /s

ファイル名に含まれるスペースと長いファイル名をオペレーティングシステムが正しく扱うようにするために完全修飾パスは二重引用符で囲む必要があります。

- 7 [選択可能なスイッチ]でインストール動作を制御するのに使いたいコマンドラインスイッチを入力します。
- 8 [実行オプション]でインストールがどのようにユーザーに表示されるかを選択します。
- 9 [OK]をクリックします。

インストールパッケージの作成

Symantec Packager では 1 つのパッケージ定義ファイルで 1 つ以上の製品設定ファイルとカスタムコマンドをバンドルできます。パッケージ定義ファイルには Symantec Packager でパッケージをビルドするのに必要な設定情報とインストール指示が含まれます。

パッケージの作成は pcAnywhere カスタムインストールでは省略可能です。Symantec Packager では Symantec pcAnywhere の製品設定ファイルをビルドでき、それによってローカルにインストールできる.msi ファイルが作成されます。Symantec pcAnywhere

.msi ファイルは他社の配備ツールを使って配備できます。Symantec Packager の配備ツールは MSI 配備をサポートしません。

パッケージ定義を作成すると次のことができます。

- 1 つのインストールパッケージで 1 つ以上の製品とカスタムコマンドをバンドルする
- 対話型、パッシブ、サイレントのいずれかのモードで実行するようにインストールを設定する
- 対話型インストールのインストールパネルにカスタムグラフィックを追加する
- 作業内容の保存要求をユーザーにするかどうかを含む再起動オプションを設定する
- 失敗したインストールを扱うためのロールバックオプションを選択する
- パッケージが正常にインストールされたかどうかを判断するためにログファイルを生成する
- テクニカルサポートの連絡先情報を含める

パッケージの設定について詳しくは Symantec Packager のヘルプを参照してください。

パッケージ定義への製品とコマンドの追加

Symantec Packager では 1 つ以上の製品またはカスタムコマンドを含むカスタムインストールパッケージを作成できます。項目をパッケージ定義ファイルに追加するとき、パッケージエディタウィンドウには製品の必要条件または競合のほかに、製品設定ファイルの定義に従って項目のプロパティが表示されます。

製品とコマンドをパッケージ定義に追加するには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[パッケージの設定]ページで次のいずれかの操作をします。
 - 新規のパッケージ定義を作成します。
 - 既存のパッケージ定義を編集するためにパッケージ定義をダブルクリックします。
- 2 パッケージエディタウィンドウの[製品の選択]ページで[追加]をクリックします。
- 3 [ファイルを開く]ダイアログボックスで追加したい製品またはカスタムコマンドファイル(.pcg)を選択します。
- 4 [開く]をクリックします。

追加する製品またはコマンドに従って概算パッケージサイズが変わります。
- 5 製品またはカスタムコマンドを更に追加するには、2 から 4 を繰り返します。
- 6 パッケージエディタウィンドウで次のいずれかの操作をします。
 - 変更内容を保存してパッケージエディタウィンドウを閉じるために[OK]をクリックします。

- 変更内容を保存してパッケージ定義の設定を続行するために[適用]をクリックします。

7 メッセージが表示されたらファイル名を入力してから[保存]をクリックします。

製品インストールとパッケージのビルド

パッケージ定義ファイルの内容とインストールオプションを定義した後でインストールファイルを作成するためにパッケージ定義をビルドします。パッケージをビルドすると指定した製品、コマンド、パッケージオプションを取り入れた自己解凍実行可能ファイル(.exe)が作成されます。

Symantec Packager では代わりに製品設定ファイルをビルドすることもでき、その場合は単一製品インストール用の .msi ファイルが作成されます。

製品設定ファイルのビルド

製品設定ファイルをビルドして作成できる .msi ファイルはテストまたはインストールに役立ちます。Symantec Packager は pcAnywhere 製品モジュールの MSI インストールのみをサポートします。製品設定ファイルはビルドしてパッケージに含める必要がありません。

Symantec Packager では .msi ファイルは Symantec Packager のデータフォルダに格納されます。このファイルはサポート .msi ファイルのリストを表示するように Symantec Packager の環境設定を編集した場合に[パッケージの配備]ページに表示できます。

業界標準の他社の配備ツールを使って pcAnywhere .msi ファイルを配備できます。Symantec Packager の配備ツールは .msi ファイルの配備をサポートしません。

製品設定ファイルをビルドするには

- 1 Symantec Packager ウィンドウの[製品の設定]ページでビルドしたい製品設定ファイルを選択します。
- 2 ファイルメニューで[ビルド]を選択します。

製品のビルド状態ウィンドウにビルドの進行状況についての情報が表示され、起きた問題はログに記録されます。製品ビルドが正常の場合、製品のビルド状態ウィンドウの最終行に次のように表示されます。

製品のビルドが正常に完了しました。

- 3 [製品のビルド状態]ダイアログボックスで[閉じる]をクリックします。

パッケージのビルド

ビルド処理中、Symantec Packager はインストールファイルにどの製品を含めるかと製品機能、インストール指示、カスタム設定を判断するためにパッケージ定義ファイルと製品設定ファイルから情報を取り込みます。次に Symantec Packager は製品の競合がな

いかパッケージの内容を調べます。製品の競合が見つかりとビルド処理を中止します。競合を解消してからビルド処理を繰り返す必要があります。

製品の競合がないか調べた後で **Symantec Packager** は製品の必要条件が満たされていることを検証します。これはすべての必須製品がパッケージ定義ファイルにあることの検証です。エラーが見つかりとユーザーにエラーメッセージを表示します。ただし、ビルド処理は続行します。

有効性の確認処理が完了した後で **Symantec Packager** は自己解凍実行可能ファイルを作成します。このファイルはテストとライセンスユーザーへの配布のために[パッケージの配備]ページに表示されます。

パッケージをビルドするには

- 1 **Symantec Packager** ウィンドウの[パッケージの設定]ページでビルドしたいパッケージ定義ファイルを選択します。
- 2 ファイルメニューで[ビルド]を選択します。

パッケージのビルド状態ウィンドウにビルドの進行状況についての情報が表示され、起きた問題はログに記録されます。パッケージビルドが正常の場合、ビルド状態ウィンドウの最終行に次のように表示されます。

パッケージビルドが成功しました。
- 3 [パッケージのビルド状態]ダイアログボックスで[閉じる]をクリックします。

パッケージのテスト

パッケージはエンドユーザーに配備する前にテストして正しい機能性を保証することが重要です。パッケージのインストールと配備は制御された独立の環境でテストしてください。1 台か 2 台のテストコンピュータで十分にテストできるはずです。

ビルド処理中に何らかのエラー検査が実行されてもインストールまで検出できないエラーがあります。これは他社製品が必要な製品がパッケージに含まれる場合またはパッケージにカスタムコマンドが含まれる場合に特に当てはまります。

インストール中、**Symantec Packager** は製品の競合がないか調べ、必須製品がインストール先コンピュータ上に存在することを検証します。**Symantec Packager** で解消できない競合が見つかりとインストールは失敗します。製品の必要条件を満たしインストールの順序が正しいことを確認するためにパッケージをテストしてください。

インストールしたそれぞれのプログラムが正しく機能することを保証するために各プログラムもテストしてください。必要な機能が存在することを確認します。このステップはインストール容量を減らすために製品をカスタマイズした場合に特に重要です。製品テストによって重要な機能を見落としていないことを確認します。パッケージを徹底的にテストしたらそのパッケージはユーザーに配備できます。

Symantec pcAnywhere カスタムインストールの配備

この章では以下の項目について説明しています。

- 配備について
- パッケージインストールファイルの場所について
- Web ベースのインストールを使ったインストールパッケージの配備
- SMS 2.0 を使った pcAnywhere の配備
- Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ログオンスクリプトを使う
- NetWare ログオンスクリプトを使う

配備について

Symantec Packager で作成したカスタム pcAnywhere インストールと Symantec pcAnywhere CD に入っている事前設定済みインストールは次の方法で配備できます。

- ローカルコンピュータでのインストール
Symantec Packager の[パッケージの配備]ページで .exe ファイルまたはサポート .msi ファイルを開くとインストール処理が始まります。インストール先コンピュータが pcAnywhere のインストールに対するシステムの必要条件を満たすことを確認してください。
[パッケージの配備]ページの使い方について詳しくは『Symantec Packager 実装ガイド』を参照してください。
pcAnywhere のインストールについて詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。
- Symantec Packager の配備ツール

このツールを使うとネットワーク上の 1 台以上のコンピュータにパッケージを配備できます。Symantec Packager の配備ツールは Microsoft 社の 32 ビットコンピュータ（たとえば、Windows 2000/2003 Server/XP/Vista）への配備のみサポートします。詳しくは Symantec pcAnywhere CD に入っている『Symantec Packager 実装ガイド』を参照してください。

■ シマンテック社の Web 配備ツール

このツールを使うと Web サーバーを使って 1 台以上のコンピュータにパッケージまたは製品のインストールを配備できます。

p.37 の「[Web ベースのインストールを使ったインストールパッケージの配備](#)」を参照してください。

■ 他社のツール

Symantec Packager で作成したパッケージと製品のインストールは Microsoft SMS (Systems Management Server の略)などの他社の配備製品を使って配布できます。

p.46 の「[SMS 2.0 を使った pcAnywhere の配備](#)」を参照してください。

■ ログオンスクリプト

Symantec Packager で作成したパッケージと製品のインストールはログオンスクリプトを使ってインストール先の Windows 2000/2003 Server/XP/Vista コンピュータと Novell NetWare コンピュータに配布できます。

p.49 の「[Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ログオンスクリプトを使う](#)」を参照してください。

p.52 の「[NetWare ログオンスクリプトを使う](#)」を参照してください。

パッケージインストールファイルの場所について

パッケージと製品の事前設定済みインストールファイルは Symantec pcAnywhere CD 上の Packages フォルダに格納されています。Symantec Packager で作成したパッケージと製品のインストールファイルのリストは Symantec Packager の「[パッケージの配備](#)」ページに表示されます。

.msi ファイルを表示するにはサポート製品 .msi ファイルのリストを表示するように Symantec Packager の環境設定を編集する必要があります。Symantec Packager は pcAnywhere .msi ファイルの MSI のインストールのみサポートします。

詳しくは Symantec Packager のヘルプまたは Symantec pcAnywhere CD に入っている『Symantec Packager 実装ガイド』を参照してください。

Web ベースのインストールを使ったインストールパッケージの配備

Symantec Packager で作成したパッケージはシマンテック社が用意する Web ベースのインストールツールを使って企業のイントラネット経由で配備できます。Web ベースのインストールの実装に必要なすべてのソースファイルが Symantec pcAnywhere CD 上の Tools¥Web Deploy フォルダにあります。

Web ベースのインストールによってパッケージを配備するには次のステップが必要です。

- Web ベースのインストールの必要条件を確認する
- インストール Web サーバーを設定する (Web サーバー上の配備フォルダへのパッケージファイルのコピーなど)
- 配備ファイルをカスタマイズする
- インストールをテストする
- ユーザーにダウンロード場所を通知する

Web ベースのインストールツールは Symantec Packager パッケージと Microsoft インストーラファイル (.msi) の配備をサポートします。Symantec Packager を使うとパッケージインストールファイルを自己解凍実行可能ファイル (.exe) として作成することも、単一製品のカスタム製品インストールを .msi ファイルとして作成することもできます。

Web ベースのインストールの必要条件について

Web ベースのインストールを実装する Web サーバーとインストール先コンピュータの必要条件を表 3-1 に示します。

表 3-1 Web サーバーとインストール先コンピュータの必要条件

配備	必要条件
Web サーバー	■ HTTP Web サーバー ■ Microsoft 社の IIS (Internet Information Server の略) バージョン 4.0/5.0 ■ Apache HTTP Server バージョン 1.3 以降 UNIX と Linux のプラットフォームもサポートされます。

配備	必要条件
インストール先コンピュータ	■ Internet Explorer 5.01 以降 Symantec pcAnywhere では Internet Explorer 6.x 以降がインストールに必要です。 ■ Windows インストーラ 3.1 以降 (MSI のインストールでのみ必要) ■ ブラウザセキュリティはインストール先コンピュータへの ActiveX コントロールのダウンロードを許可する必要があります。 インストールが完了したらセキュリティレベルを元の設定に戻してください。 ■ インストールするパッケージのシステム要件を満たす必要があります。 ■ パッケージのインストールに必要な権限でコンピュータにログオンする必要があります。 pcAnywhere をインストールするには管理者権限が必要です。

インストール Web サーバーの設定

Web サーバーを設定するには次の順序でタスクを完了します。

- インストールファイルを Web サーバーにコピーする
- Web サーバーを設定する

インストールファイルの Web サーバーへのコピー

Web ベースのインストールをサポートするのに必要なインストールファイルを Web サーバー上のフォルダにコピーする必要があります。このファイル用に Web サーバー上に別のフォルダを作成してください。利用可能にしたいインストールファイル(.exe または .msi) もコピーする必要があります。

ファイルは大文字と小文字が区別されます。Web サーバー上のフォルダ構造の例を次に示します。

Deploy¥Webinst

- brnotsup.htm
- default.htm
- intro.htm
- logo.jpg
- oscheck.htm
- plnotsup.htm
- readme.htm
- start.htm
- webinst.cab

Deploy¥Webinst¥Webinst

- files.ini
- Launch.bat (MSI インストールでのみ必要)
- インストールパッケージ
次に例を示します。
Symantec pcAnywhere - Full Product.exe
Symantec pcAnywhere - Host Only (Network).msi

このコピー処理の完了後に、インストールファイルの場所と名前を指定するように **start.htm** ファイルと **files.ini** ファイルを編集する必要があります。

p.41 の「[配備ファイルのカスタマイズ](#)」を参照してください。

インストールファイルを Web サーバーにコピーするには

- 1 Web サーバー上に配備ファイルのコピー先にしたいフォルダを作成します。

次に例を示します。

Deploy

- 2 Symantec pcAnywhere CD 上の Packages フォルダから、配備用に利用可能にしたいインストールファイルを Web サーバー上の Webinst サブフォルダにコピーします。

次に例を示します。

Deploy¥Webinst¥Webinst

- 3 仮想ディレクトリのデフォルト文書が **Default.htm** であることを確認します。

p.38 の「[インストール Web サーバーの設定](#)」を参照してください。

Web サーバー上の仮想ディレクトリの作成

Web サーバーは仮想ディレクトリを作成する設定にしてください。

Web ベースのインストールツールは Microsoft 社の IIS または Apache HTTP Web Server をサポートします。これらのサーバーでは仮想ディレクトリの作成の操作手順が異なります。

Microsoft 社の IIS 上で仮想ディレクトリを作成するには

- 1 インターネットサービスマネージャを起動するために次のいずれかの操作をします。
 - IIS 4.0 の場合、Windows のスタートメニューで[プログラム]、[Windows NT 4.0 Option Pack]、[Microsoft Internet Information Server]、[インターネットサービスマネージャ]の順に選択します。
 - IIS 5.0 の場合、Windows のスタートメニューで[プログラム]、[管理ツール]、[インターネットサービスマネージャ]の順に選択します。
- 2 開くために Web サーバーアイコンをダブルクリックします。
- 3 [既定の Web サイト]を右クリックしてから[新規作成]、[仮想ディレクトリ]の順に選択します。
- 4 仮想ディレクトリ作成のウィザードが表示された後、[次へ]をクリックします。
- 5 [エイリアス]テキストボックスに仮想ディレクトリの名前(たとえば、Webinstall)を入力してから[次へ]をクリックします。
- 6 インストールフォルダの場所(たとえば、C:¥Client¥Webinst)を入力してから[次へ]をクリックします。
- 7 アクセス権限として[読み取り]を選択してから[次へ]をクリックします。
- 8 仮想ディレクトリの作成を完了するために次のいずれかの操作をします。
 - IIS 4.0 の場合、[完了]をクリックします。
 - IIS 5.0 の場合、[次へ]をクリックしてから[完了]をクリックします。

Apache Web Server 上で仮想ディレクトリを作成するには

- 1 テキストエディタで次のいずれかの操作をします。
 - Apache Web Server 2.0 以降を使う場合には httpd.conf を開きます。
このファイルはデフォルトでは C:¥Program Files¥Apache Group¥Apache2¥conf にインストールされます。
 - Apache Web Server 1.3 を使う場合には srm.conf を開きます。

このファイルはデフォルトでは C:\Program Files\Apache Group\Apache\conf にインストールされます。

2 ファイルの終わりに次の行を入力します。

```
DirectoryIndex default.htm

<VirtualHost 111.111.111.111>

#ServerName machinename

DocumentRoot "C:\Client\Webinst"

</VirtualHost>
```

VirtualHost	111.111.111.111 の部分は Apache HTTP Server をインストールしてあるコンピュータの IP アドレスに置き換えます。
ServerName	machinename の部分はサーバーの名前に置き換えます。
DocumentRoot	Web インストールファイルをコピーしたフォルダを ("C:\Deploy\WebInst" のように) 指定します。 DocumentRoot を指定するには二重引用符が必要です。二重引用符を付けないと Apache サービスが開始されないことがあります。

配備ファイルのカスタマイズ

Web ベースのインストールツールを使ってパッケージの配備とインストールをするために次のファイルを編集する必要があります。

Start.htm	Web サーバーのパラメータとインストールする必要のあるファイルの場所を含みます。 このファイルは Webinstall フォルダのルートにあります。
Files.ini	配備とインストールをしたいパッケージとファイルのファイル名パラメータを含みます。 このファイルは Webinst サブフォルダにあります。
Launch.bat	パッケージインストールの実行に使うコマンドラインを含みます。 このファイルは Webinst サブフォルダにあります。このファイルは MSI インストールでのみ必要です。

Start.htm のカスタマイズ

Start.htm ファイルのパラメータは Web サーバーとインストールする必要のあるファイルの場所についての情報を含みます。設定パラメータは Start.htm ファイルの末尾近くの <object>タグ内にあります。

設定パラメータの説明を表 3-2 に示します。

表 3-2 Start.htm の設定パラメータと値

パラメータ	値
ServerName	インストールソースファイルを含むサーバーの名前。ホスト名、IP アドレス、NetBIOS 名が使えます。ソースファイルは HTTP Web サーバー上にある必要があります。
VirtualHomeDirectory	インストールソースファイルを含む HTTP サーバーの仮想ディレクトリ(たとえば、Webinstall)。
ConfigFile	Files.ini ファイルのファイル名。Files.ini の名前を変更しない限りこのパラメータのデフォルト値は変更する必要がありません。
ProductFolderName	ローカルにダウンロードするソースファイルを含むサブフォルダ。このサブフォルダ(たとえば、Webinst)はパッケージと Files.ini を含みます。
MinDiskSpaceInMB	ハードディスクの最低容量。デフォルト値は適宜変わります。
ProductAbbreviation	製品の省略名。デフォルト値は適宜変わります。

Start.htm をカスタマイズするには

- 1 テキストエディタで Start.htm を開きます。
- 2 <object>タグを検索して正しい値を入力します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。

パッケージ配備用の Files.ini のカスタマイズ

Files.ini は配備したいパッケージ実行可能ファイルの名前を含むように修正します。MSI の配備をサポートするには追加の情報が必要です。

p.43 の「MSI 配備用の Files.ini のカスタマイズ」を参照してください。

他社のアプリケーションの配備をサポートするために追加のファイルを含めることもできます。

パッケージ配備用に Files.ini をカスタマイズするには

- 1 テキストエディタで Files.ini を開きます。ファイルの属性が読み取り専用になっている場合は、ファイルのプロパティで属性のチェックマークをはずしておきます。
- 2 [全般]セクションでダウンロードの完了後に起動したいパッケージ実行可能ファイルを参照するように LaunchApplication= 行を編集します。

次に例を示します。

LaunchApplication=Symantec pcAnywhere - Full Product.exe

- 3 複数のファイルを配備する場合、配備したいファイルの数に合わせて FileCount= 行を編集します。

デフォルト設定は FileCount=1 です。

- 4 [ファイル]セクションで配備したいパッケージの名前を参照するように File1= 行を編集します。

次に例を示します。

File1=Symantec pcAnywhere - Full Product.exe

長いファイル名を使えます。

- 5 追加のファイルごとに新しい Filen=< ファイル名 > 行を追加します。n は固有の番号で、< ファイル名 > はファイルの名前です。
- 6 ファイルを保存して閉じます。

MSI 配備用の Files.ini のカスタマイズ

Files.ini は配備したい .msi ファイルの名前を含むように修正します。MSI の配備ではインストールプログラムの起動に使う Launch.bat が必要です。Files.ini は Launch.bat ファイルを参照するように修正する必要があります。

p.44 の「[Launch.bat のカスタマイズ](#)」を参照してください。

他社のアプリケーションの配備をサポートするために追加のファイルを含めることもできます。

MSI 配備用に Files.ini をカスタマイズするには

- 1 テキストエディタで Files.ini を開きます。ファイルの属性が読み取り専用になっている場合は、ファイルのプロパティで属性のチェックマークをはずしておきます。
- 2 [全般]セクションで Launch.bat を参照するように LaunchApplication= 行を編集します。

次に例を示します。

LaunchApplication=Launch.bat

ダウンロードの完了後に MSI のインストールが起動します。配備したい .msi ファイルの名前を含むように Launch.bat ファイルを編集する必要もあります。

- 3 配備したいファイルの数に合わせて FileCount= 行を編集します。

MSI の配備では 2 つのファイルが必要なので、FileCount= 行は 2 以上に設定する必要があります。

次に例を示します。

FileCount=2

- 4 [ファイル]セクションで Launch.bat ファイルを参照するように File1= 行を編集します。

次に例を示します。

File1=Launch.bat

- 5 File2= 行の隣のセミコロンを削除してこのエントリをコメント解除します。
- 6 配備したい .msi ファイルの名前を参照するように File2= 行を編集します。

次に例を示します。

File2=Symantec pcAnywhere - Host Only.msi

長いファイル名を使えます。

- 7 追加のファイルごとに新しい Filen=< ファイル名 > 行を追加します。n は固有の番号で、< ファイル名 > はファイルの名前です。
- 8 ファイルを保存して閉じます。

Launch.bat のカスタマイズ

Launch.bat は MSI のインストールを実行するために使うコマンドライン引数を含みます。このファイルは MSI のインストールでのみ必要です。

Launch.bat は配備したい .msi ファイルを指定するように修正します。デフォルトの Launch.bat ファイルは Windows システムのフォルダのパスを設定します。

Launch.bat を実行するように Files.ini ファイルを編集する必要もあります。

p.43 の「[MSI 配備用の Files.ini のカスタマイズ](#)」を参照してください。

メモ: .msi ファイルのインストールには Windows インストーラ 3.1 以降が必要です。製品インストールを配備する前にインストール先コンピュータがシステムの必要条件を満たすことを確認してください。

Launch.bat をカスタマイズするには

- 1 テキストエディタで Launch.bat を開きます。ファイルの属性が読み取り専用になっている場合は、ファイルのプロパティで属性のチェックマークをはずしておきます。
- 2 ファイルに次のコマンドラインがあることを確認します。
`@SET PATH=%path%;%windir%¥system`
- 3 配備したい .msi ファイルの名前を示すように `@msiexec -i Package.msi` 行を編集します。
たとえば、`@msiexec -i Symantec Packager - Host Only.msi` のようにします。
- 4 ファイルを保存して閉じます。

Web サーバー上のインストールのテスト

インストールをテストするには Web サイト(たとえば、< Webサイト >/webinstall)で[インストール]をクリックします。

インストールに失敗するとエラーメッセージが表示されます。次の指針に従って問題のトラブルシューティングをしてください。

- Start.htm のパラメータに問題がある場合には Web ベースのインストールでアクセスを試みるファイルのパスを示すエラーメッセージが表示されます。パスが正しいことを確認します。
- 「ファイルが見つかりません。」エラーのように Files.ini に問題がある場合には File1= 値とパッケージファイルの実際の名前を比較します。
- 修正時に他のエントリを変更しなかったことを確認します。

ユーザーへのダウンロード場所の通知

管理者は配備したいパッケージのダウンロードを電子メールでユーザーに指示できます。

pcAnywhere インストールパッケージをインストールするユーザーのコンピュータ上には Internet Explorer 6.0 以降が必要です。ローカルイントラネット用の Internet Explorer のセキュリティレベルは(シマンテック社の ActiveX コントロールをクライアントにダウンロードできるように)中レベルに設定する必要があります。インストールが完了したらセキュリティレベルを元の設定に戻してください。

インストールする製品に必要な管理者権限がユーザーにあることを確認します。たとえば、Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista を使うユーザーは pcAnywhere をインストールするために自分のコンピュータ上で管理者権限が必要であり管理者権限でログオンする必要があります。

インストールの終わりにクライアントコンピュータを再起動する場合には、ユーザーにインストールを開始する前に作業中のデータを保存してアプリケーションを終了するように通知してください。たとえば、Windows 98 コンピュータ上でサイレントインストールを実行するとセットアップの終わりにコンピュータが再起動します。

クライアントインストールを指す URL を次の形式で電子メールメッセージに含めてください。

■ IIS の場合

`http://SERVER_NAME/VIRTUAL_HOME_DIRECTORY/webinst/`
SERVER_NAME は Web ベースのサーバーの名前、VIRTUAL_HOME_DIRECTORY は作成したエイリアス、webinst は Web サーバー上に作成したフォルダです。
次に例を示します。

`http://SERVER_NAME/ClientInstall/Webinst/`

■ Apache Web Server の場合

`http://SERVER_NAME/webinst/`
SERVER_NAME は Apache Web Server をインストールしてあるコンピュータの名前です。SERVER_NAME ではなくそのサーバーコンピュータの IP アドレスを使うこともできます。

SMS 2.0 を使った pcAnywhere の配備

Microsoft SMS 2.0 で pcAnywhere を配備するには次のコンポーネントが必要です。

pcAnywhere インストールファイル

Symantec Packager で作成したインストールパッケージまたはカスタム製品インストールです。

インストールパッケージまたはカスタム製品インストールは自己解凍 .exe ファイルまたは .msi ファイルとして作成できます。

SMS パッケージ

SMS クライアントコンピュータにソフトウェアを配置してインストールするために使うインストールソースとパッケージの集合です。

SMS パッケージは SMS を使ったインストールをサポートする任意の種類のソフトウェアプログラムです。

パッケージ定義ファイル

SMS パッケージを作成して配備するために SMS が使う SMS 固有の情報ファイルです。

pcAnywhere に付属のデフォルトのパッケージ定義ファイル (PDF) は pcAnywhere.pdf です。

SMS による配備の最小必要条件

SMS を使って pcAnywhere を配備するには次のリソースが必要です。

- Windows NT 4.0 Server Service Pack 6a 以降
- SQL Server 6.5 以降
- SMS 2.0 Service Pack 1 から 5
- Symantec Packager 1.0 以降と配備用に作成されたカスタムパッケージ

すべての配備クライアントが SMS 配布サーバーと同じドメインのメンバーであるか、すべてのクライアント上で SMS サーバー管理者権限が許可されるように適切な権限のある信頼関係がドメイン間に設定されている必要があります。

SMS 2.0 は Windows NT 4.0 Service Pack 6a 以降にインストールする必要があります。SMS Service Pack 2 以降を Microsoft 社から取得することをお勧めします。

SMS の必要条件と更新について詳しくは Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

[//www.microsoft.com/sms](http://www.microsoft.com/sms)

SMS による配備

SMS による配備には次のステップが必要です。

- パッケージ定義ファイルの準備
- SMS 配備パッケージの作成
- 配布ポイントの割り当て
- パッケージの提供情報

パッケージ定義ファイルの準備

デフォルトのパッケージ定義ファイル (pcAnywhere.pdf) が pcAnywhere に付属しています。このファイルは Symantec Packager で作成した任意のパッケージに合わせて修正できます。

付属のパッケージ定義ファイルを修正しないで使うには次のいずれかの操作をします。

- .exe ベースのパッケージの場合には使いたい pcAnywhere パッケージの名前を Package.exe に変更します。

- .msi ベースのパッケージの場合には使いたい pcAnywhere パッケージの名前を Package.msi に変更します。

パッケージ定義ファイルのカスタマイズについて詳しくは SMS のマニュアルを参照してください。

付属のパッケージ定義ファイルにある次の値は削除も変更もしないでください。

- AfterRunning=ProgramRestart
- CanRunWhen=UserLoggedOn
- AdminRightsRequired=TRUE

SMS 配備パッケージの作成

クライアントコンピュータ上で実行したい pcAnywhere インストールの種類ごとに SMS パッケージを作成して配布を設定する必要があります。

SMS 配備パッケージを作成するには

- 1 Symantec Packager を使って必要な製品インストール .msi ファイルまたはパッケージインストール .exe ファイルを作成するか、付属の事前設定済み pcAnywhere パッケージの 1 つを使います。
- 2 SMS 管理コンソールで [パッケージ] を右クリックしてから [新規作成]、[定義からパッケージ] の順に選択します。
- 3 [定義に基づくパッケージの作成] ウィザードで パッケージファイルの名前を要求するメッセージが表示されたら [参照] をクリックして pcAnywhere.pdf ファイルを検索します。

デフォルトの場所は C:\Program Files\Symantec\pcAnywhere\CMS です。

- 4 [開く] をクリックします。
[定義に基づくパッケージの作成] ウィザードに pcAnywhere のパッケージ定義が表示されます。
- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 [常にソースディレクトリからファイルを取得する] を選択します。
[パッケージにファイルを含めない] は選択しないでください。
- 7 [参照] をクリックして Symantec Packager で作成した pcAnywhere パッケージ (または付属の事前設定済みパッケージ) が入っているフォルダを検索します。
[定義に基づくパッケージの作成] ウィザードはこのフォルダを使って pcAnywhere パッケージの場所を示します。
- 8 [定義に基づくパッケージの作成] ウィザードを完了すると pcAnywhere パッケージが SMS 管理コンソールに表示されます。

配布ポイントの割り当て

SMS パッケージを作成した後でパッケージの配布ポイントを指定する必要があります。

配布ポイントを割り当てるには

- 1 [配布ポイント]を右クリックしてから[新規作成]、[配布ポイント]の順に選択します。
- 2 パッケージを配布したい[配布ポイント]を選択します。
- 3 [完了]をクリックして配布ポイントウィザードを完了します。

パッケージの提供情報

pcAnywhere インストールをクライアントに送信するには1つ以上のパッケージインストールの提供情報を作成する必要があります。

メモ: EXE ベースのインストーラで作成された提供情報にはユーザーの操作が必要です。ユーザーはインストールファイルを抽出する一時フォルダをローカルクライアントコンピュータ上で選択する必要があります。ファイルの抽出後はセットアップを開始して **pcAnywhere** をインストールするために[はい]をクリックします。インストールが完了したらユーザーは一時セットアップファイルを削除する必要があります。

パッケージに提供情報を付けるには

- 1 [提供情報]を右クリックしてから[新規作成]、[提供情報]の順に選択します。
- 2 提供情報を付けたいパッケージを選択します。
- 3 提供情報に名前を付けます。
- 4 MSI ベースのインストールをサポートする Windows 2000 クライアントに配布するには、ドロップダウンメニューで[Windows 2000]を選択します。
- 5 [参照]をクリックしてインストールの提供情報先にしたい集合を指定します。
- 6 パッケージのスケジュール、必要条件、適切なセキュリティ権限を設定します。

提供情報を作成すると **pcAnywhere** は選択したすべてのクライアントに配備されます。

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ログオンスクリプトを使う

Windows ドメインではログオンスクリプトを使って **pcAnywhere** パッケージを Windows クライアントに配備できます。次のステップが必要です。

- サーバーの設定

- ログオンスクリプトの作成
- ログオンスクリプトのテスト

pcAnywhere パッケージをインストールするには Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ユーザーにコンピュータのローカル管理者権限が必要です。

Windows サーバーの設定

サーバーは pcAnywhere パッケージの格納とログオンスクリプトの実装ができる設定にする必要があります。これを実行するにはドメイン管理者権限が必要です。

Windows サーバーを設定するには

- 1 サーバー上で PCAHOME というフォルダを作成します。
- 2 デフォルトの共有名 PCAHOME を使ってフォルダを共有します。
- 3 すべてのユーザーに読み取りアクセスが許可されるようにこの共有の権限を設定します。
- 4 pcAnywhere パッケージを PCAHOME 共有にコピーします。

Windows ログオンスクリプトの作成

pcAnywhere パッケージを Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista クライアントに配備するために次のログオンスクリプト例が使えます。このスクリプトは単純なバッチファイルで、pcAnywhere パッケージをワークステーションにコピーして pcAnywhere パッケージインストールを起動し、完了時にインストールファイルを消去します。

次の例ではデフォルトのインストールフォルダを使います。特定の環境で実行するには必要に応じてデフォルトのインストールフォルダを修正します。

```
@echo off
setlocal
```

```
REM ***** Package Variable -- Change to name of pcA Package *****
Set Package=Package.MSI
```

```
REM ***** EXE or MSI Variable -- Change to package type (MSI or EXE)
*****
Set PkgType=MSI
```

```
Rem ***** File Server Name Variable *****
```

```
Rem ***** Change to server containing the pcA Package *****
Set FSName=¥¥2KServer

REM ***** Maps a drive to the network share *****
net use z:%FSName%¥¥PCAHOME

REM ***** Checks for pcA in default folder
If exist c:¥progra~1¥Symant~1¥pcanyw~1¥anywhere.bin GOTO End

REM ***** Creates a folder in the Temp dir, and copies the package
*****
C:
CD %TEMP%
MD pcapkg
CD pcapkg
Z:
COPY %Package% C:

REM ***** Launch Package Installation *****
C:
IF %PkgType% == MSI msixexec -i %Package%
IF %PkgType% == EXE %Package%

REM ***** Cleanup *****
del %Package%
CD ..
rd pcapkg
Net Use Z:/DELETE

:End
endlocal
```

Windows ログオンスクリプトのテスト

完成したスクリプトをすべてのユーザーに設定する前に1台か2台のワークステーションでテストします。pcAnywhere パッケージをインストールするには Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ユーザーにコンピュータのローカル管理者権限が必要です。

NetWare ログオンスクリプトを使う

Novell NetWare ネットワークではログオンスクリプトを使って **pcAnywhere** パッケージを Windows クライアントに配備できます。次のステップが必要です。

- サーバーの設定
- ログオンスクリプトの作成
- ログオンスクリプトのテスト

pcAnywhere パッケージをインストールするには Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista ユーザーにコンピュータのローカル管理者権限が必要です。

Novell NetWare サーバーの設定

サーバーは **pcAnywhere** パッケージの格納とログオンスクリプトの実装ができる設定にする必要があります。これを実行するには管理者権限が必要です。

Novell NetWare サーバーを設定するには

- 1 ドライブ Z: を SYS: ボリュームにマップします。
別のドライブ名を使う場合にはドライブ名を適切に置き換えます。
- 2 Z:\LOGIN フォルダに PCA というフォルダを作成します。
- 3 PCA_Users というグループを作成します。
PCA_Users グループは NDS ログオンとバインダリログオンの両方のホストになるサーバーのデフォルトコンテキストに存在する必要があります。サーバーが NDS ログオンだけのホストになる場合にはサーバー上に格納された NDS パーティションにあるコンテキストに存在する必要があります。
- 4 PCA_Users グループに PCA フォルダの読み取りアクセスを許可します。
- 5 **pcAnywhere** パッケージを PCA フォルダにコピーします。

NetWare ログオンスクリプトの作成

次のログオンスクリプトと配備バッチファイルの例を使って **pcAnywhere** をロールアウトします。このスクリプトはローカルワークステーションへの適切なドライブマッピングを作成して配備バッチファイルを起動します。このバッチファイルは **pcAnywhere** パッケージをインストールして完了時にインストールファイルを削除します。

次の例ではデフォルトのインストールフォルダを使います。特定の環境で実行するには必要に応じてデフォルトのインストールフォルダを修正します。

NetWare ログオンスクリプト

```
REM ***** Default mappings *****
MAP *1:=SYS:

REM ***** Maps a drive to the network share *****
MAP Z:=SYS:LOGIN¥PCA

REM ***** Launches the deployment batch file *****
#Cmd /c z:¥deploy.bat

Exit
```

配備バッチファイル

```
@echo off
setlocal

REM ***** Package Variable -- Change to name of pcA Package *****
Set Package=Package.MSI

REM ***** EXE or MSI Variable -- Change to package type (MSI or EXE)
*****
Set PkgType=MSI

REM ***** Checks for pcA in default folder *****
If exist c:¥progra~1¥Symant~1¥pcanyw~1¥anywhere.bin GOTO End

REM ***** Creates a folder in the Temp dir, and copies the package
*****
C:
CD %TEMP%
MD pcapkg
CD pcapkg
Z:
COPY %Package% c:
```

```
REM ***** Launches package installation *****  
C:  
IF %PkgType% == MSI msixexec -i %Package%  
IF %PkgType% == EXE %Package%  
  
REM ***** Cleanup *****  
del %Package%  
CD ..  
rd pcapkg  
  
:End  
endlocal
```

NetWare ログオンスクリプトのテスト

完成したスクリプトをすべてのユーザーに設定する前に1台か2台のワークステーションでテストします。**pcAnywhere** パッケージをインストールするには **Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista** ユーザーにコンピュータのローカル管理者権限が必要です。

集中型管理の実行

この章では以下の項目について説明しています。

- [集中型管理について](#)
- [pcAnywhere ホストのリモート管理](#)
- [Microsoft 社の SMS との統合](#)
- [Microsoft DCOM について](#)
- [集中型ログ記録について](#)

集中型管理について

Symantec pcAnywhere にある pcAnywhere Host Administrator ツールを使うと、ネットワーク上にある複数の pcAnywhere ホストをリモート管理できます。pcAnywhere Host Administrator ツールは MMC (Microsoft Management Console の略) スナップインで、MMC が動作している環境が必要です。

Symantec pcAnywhere は Microsoft 社の SMS との統合をサポートします。さらに SNMP モニターを使った集中型イベントログ記録もサポートします。

p.62 の「[Microsoft 社の SMS との統合](#)」を参照してください。

p.65 の「[集中型ログ記録について](#)」を参照してください。

pcAnywhere ホストのリモート管理

pcAnywhere Host Administrator ツールを使うとネットワーク上の複数のホストをリモート管理できます。次の操作ができます。

- ネットワーク上の pcAnywhere ホストをリモートから開始、中止、接続する

- ネットワーク上の複数のワークステーションをリモートで管理、設定するための設定グループを作成する
- ホスト、リモート、呼び出し側のファイルなどの pcAnywhere 設定ファイルをネットワーク上の複数のワークステーションに同時に配布する

pcAnywhere Host Administrator ツールのインストール

pcAnywhere Host Administrator ツールは完全製品インストールのカスタムセットアップオプションとして選択できます。pcAnywhere Host Administrator ツールは Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista で動作します。

pcAnywhere のインストール後に Host Administrator ツールをインストールするには次の手順に従ってください。

pcAnywhere Host Administrator ツールをインストールするには

- 1 Windows のスタートメニューで[設定]、[コントロールパネル]の順に選択します。
- 2 コントロールパネルウィンドウで[アプリケーションの追加と削除] (Windows XP では [プログラムの追加と削除]) をダブルクリックします。
- 3 アプリケーションの追加と削除ウィンドウで [Symantec pcAnywhere] をクリックします。
- 4 [変更] をクリックします。
- 5 [Symantec pcAnywhere を修正または削除します] パネルで [次へ] をクリックします。
- 6 プログラムの保守パネルで [修正] を選択してから [次へ] をクリックします。
- 7 カスタムセットアップパネルの [pcAnywhere ツール] で [pcAnywhere Host Administrator] の左にある下矢印をクリックしてから [この機能をローカルのハードディスクドライブにインストールします。] を選択します。
- 8 [pcAnywhere Host Administrator Agent] の左にある下矢印をクリックしてから [この機能をローカルのハードディスクドライブにインストールします。] を選択します。

Host Administrator Agent は DCOM (Distributed Component Object Management の略) 技術を使った pcAnywhere のリモート管理を許可するために必要です。

- 9 [次へ] をクリックします。
- 10 Windows デスクトップにプログラムアイコンを追加するには [pcAnywhere Host Administrator] を選択します。

- 11 [インストール]をクリックします。
- 12 画面の指示に従ってインストール処理を続行します。インストールが完了したら[完了]をクリックします。

コンピュータでシステムファイルの更新が必要な場合にはコンピュータの再起動を要求するメッセージが表示されます。この再起動は適切な機能性を保証するために必要です。

MMC への Host Administrator スナップインの追加

MMCを使うと1つの中央の場所から管理者ツールの実行と管理ができます。pcAnywhere Host Administrator ツールはインストールと同時にスナップインとして MMC に追加できます。

MMC は Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista のオペレーティングシステムに含まれています。MMC のインストールが必要な場合は Symantec pcAnywhere CD からインストールできます。

Host Administrator スナップインを MMC に追加するには

- 1 次のいずれかの操作をします。
 - Windows 2000/2003/Server 2008/ XP のスタートメニューで[プログラム]、[pcAnywhere Host Administrator]の順に選択します。
 - Windows Vista のスタートメニューでは[すべてのプログラム]、[pcAnywhere Host Administrator]の順に選択します。
- 2 MMC を起動するには Windows のスタートメニューで[ファイル名を指定して実行]を選択してから mmc と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 コンソールメニューで[スナップインの追加と削除]を選択します。
- 5 [スナップインの追加と削除]ダイアログボックスの[スタンドアロン]ページで[追加]をクリックします。
- 6 [スタンドアロン スナップインの追加]ダイアログボックスで[pcAnywhere Host Administrator]をクリックします。
- 7 [追加]をクリックします。
- 8 [閉じる]をクリックします。
- 9 スナップインの追加と削除ウィンドウで[OK]をクリックします。

設定グループの作成

pcAnywhere Host Administrator コンソールを使ってコンピュータをリモートで管理、設定するには設定グループを作成してからコンピュータをそのグループに追加する必要があります。

p.58 の「[設定グループへのコンピュータの追加](#)」を参照してください。

MMC を使っている場合、pcAnywhere Host Administrator コンソールは [Console Root] の下に表示されます。

詳しくは MMC のマニュアルを参照してください。

設定グループを作成するには

- 1 コンソールウィンドウの左ペインの [pcAnywhere Administrator] で [設定グループ] を右クリックしてから [新規作成]、[設定グループ] の順に選択します。
- 2 このグループに付ける名前を入力します。
- 3 [OK] をクリックします。

設定グループへのコンピュータの追加

設定グループを作成したらリモート管理したいコンピュータを追加する必要があります。コンソールウィンドウにネットワーク上にあるドメインとワークグループのリストが表示されます。

設定グループにコンピュータを追加するには

- 1 コンソールウィンドウの左ペインで Microsoft Windows Network など、追加したいコンピュータの場所を参照します。
- 2 左ペインで追加したいコンピュータがあるシステムを右クリックしてから [設定グループにシステムを追加] を選択します。
- 3 [設定グループにシステムを追加] ダイアログボックスで追加したいコンピュータを選択します。
- 4 [配布先グループの選択] でコンピュータの追加先にしたい設定グループを選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

管理者のホスト接続項目とリモート接続項目の設定

pcAnywhere Host Administrator ツールを使ってネットワーク上でホストをリモート管理できるようにする前に管理者のホスト接続項目とリモート接続項目を設定する必要があります。この接続項目ファイルには pcAnywhere Host Administrator コンソールと管理したいホストコンピュータとの間の接続をサポートするのに必要な接続設定とセキュリティ設定が入っています。

Symantec pcAnywhere にはテンプレートとして使える事前設定済みの次のホスト接続項目とリモート接続項目が用意されています。

Admin.bhf	リモート管理したいホストコンピュータ用のホストテンプレート。 このテンプレートを使ってホストセッションを開始するには呼び出し側情報を設定する必要があります。Symantec pcAnywhere のすべてのホストセッションにはユーザー名とパスワードが必要です。 詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。
Admin11.chf	リモートでのホストの管理元にしたいコンピュータ用の Host Administrator テンプレート。

pcAnywhere でこのテンプレートを修正することも、新しい管理者項目を作成することもできます。テンプレートファイルは次のディレクトリにあります。

¥Program Files¥Symantec¥pcAnywhere¥CMS

新しい管理者リモート項目の作成

管理者のリモート接続項目には **pcAnywhere Host Administrator** コンソールからホストコンピュータに接続するのに必要な接続情報とセキュリティ情報が入っています。このファイルの拡張子は .CHF です。

このファイルは CMS フォルダに追加して **pcAnywhere Host Administrator** ツールで使うことも、インストールパッケージに含めることもできます。

新しい管理者リモート項目を作成するには

- 1 **pcAnywhere** マネージャウィンドウの左のナビゲーションバーで[リモート]をクリックします。
- 2 ファイルメニューで[新しい項目]、[拡張]の順に選択します。
- 3 リモートプロパティウィンドウの[接続情報]ページで次のいずれかのネットワークプロトコルを選択します。
 - [TCP/IP]
 - [SPX]
 - [NetBIOS]
- 4 リモートプロパティウィンドウで他の使いたいオプションを設定します。
- 5 設定が終わったら[OK]をクリックします。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

- 6 pcAnywhere マネージャウィンドウの右ペインの[リモート]で作成したリモート接続項目を右クリックしてから[名前の変更]を選択します。
- 7 名前を入力します。
次に例を示します。
Admin11

新しい管理者ホスト項目の作成

管理者のホスト接続項目には **pcAnywhere Host Administrator** コンソールからの接続をリモートの管理者に許可するのに必要な接続情報とセキュリティ情報が入っています。呼び出し側項目を含める必要があります。

このファイルの拡張子は **.bhf** です。呼び出し側ファイルの拡張子は **.cif** です。この2つのファイルは **CMS** フォルダに追加して **pcAnywhere Host Administrator** で使うことも、インストールパッケージに含めることもできます。

新しい管理者ホスト項目を作成するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウの左のナビゲーションバーで[ホスト]をクリックします。
- 2 ファイルメニューで[新しい項目]、[拡張]の順に選択します。
- 3 ホストプロパティウィンドウの[接続情報]ページで次のいずれかのネットワークプロトコルを選択します。
 - [TCP/IP]
 - [SPX]
 - [NetBIOS]
- 4 [呼び出し側]ページで使いたい認証の種類を選択します。
- 5 [呼び出し側リスト]で新しい項目アイコンをクリックします。
- 6 呼び出しプロパティウィンドウでホストコンピュータに接続できるユーザーのログオン情報を入力してから[OK]をクリックします。
すべてのホストセッションにユーザー名とパスワードが必要です。他の設定もできます。たとえば、アクセス権を設定できます。
詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。
- 7 ホストプロパティウィンドウで他の使いたいオプションを設定してから[OK]をクリックします。
詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

- 8 pcAnywhere マネージャウィンドウの右ペインの[ホスト]で作成したホスト接続項目を右クリックしてから[名前の変更]を選択します。
- 9 名前を入力します。
次に例を示します。
Admin

pcAnywhere Host Administrator でのホスト項目の設定

pcAnywhere Host Administrator ツールを使うと設定グループのホストコンピュータに配布できるホスト項目を作成できます。Symantec pcAnywhere ではホストコンピュータに接続するユーザーのログオンアカウントを設定し、ユーザーの ID を確認するための認証方法を選択する必要があります。

pcAnywhere Host Administrator でホスト項目を設定するには

- 1 コンソールウィンドウの左ペインで[pcAnywhere Administrator]の下[設定グループ]の左にある正符号(+)をクリックして展開します。
- 2 ホスト項目の追加先にしたい設定グループの名前の下の[接続項目]を右クリックしてから[新規作成]、[ホスト]の順に選択します。
- 3 この接続項目に付ける名前を入力します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 呼び出し側情報と他の使いたいオプションを指定してホスト接続項目を設定します。
詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

pcAnywhere 設定ファイルの配布

pcAnywhere Host Administrator ツールを使うと pcAnywhere Host Administrator コンソールから設定グループのホストコンピュータにホスト接続項目などの pcAnywhere 設定ファイルを配布できます。

ホストコンピュータは接続待ちである必要があります。

pcAnywhere 設定ファイルを配布するには

- 1 pcAnywhere Host Administrator コンソールの左ペインで[pcAnywhere Host Administrator]の下[設定グループ]の左にある正符号(+)をクリックして展開します。
- 2 [設定グループ]でファイルの送信先にしたい設定グループを右クリックしてから[pcAnywhere ファイルの配布]を選択します。
- 3 [pcAnywhere ファイルの配布]ダイアログボックスでファイルの配布先にしたいコンピュータを選択します。

- 4 配布したいファイルを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

設定グループでのホストの管理

設定グループにコンピュータを設定した後は **pcAnywhere Host Administrator** コンソールを使ってグループのいずれかの管理下のホストを開始、中止、接続します。

設定グループでホストを管理するには

- 1 **pcAnywhere Host Administrator** コンソールの左ペインで[**pcAnywhere Host Administrator**]の下[設定グループ]の左にある正符号(+)をクリックして展開します。
- 2 [設定グループ]で設定グループの名前の左にある正符号(+)をクリックして展開します。
- 3 [システム]で管理したいコンピュータを右クリックしてから[すべてのタスク]を選択します。
- 4 次のいずれかを選択します。

[特定ホストの開始]	選択済みホストコンピュータ上でホストセッションを開始します。
[Admin ホストを開始]	Host Administrator コンピュータ上でホストセッションを開始します。
[最後のホストを開始]	最後にホストセッションを開始したコンピュータ上でホストセッションを開始します。
[ホストを中止]	ホストセッションを中止してホスト上のアクティブセッションを接続解除します。
[Admin ホストに接続]	admin11.chf リモートファイルの設定を使って Host Administrator コンピュータに接続します。
[Admin ホストの設定]	Host Administrator コンピュータ上の設定を再設定します。
[活動ログの取得]	リモートコンピュータから活動ログを取り込みます。

Microsoft 社の SMS との統合

Symantec pcAnywhere は Microsoft 社の SMS との統合をサポートします。SMS は Microsoft Windows ベースのコンピュータとサーバーのための変更と設定を管理する拡張性のあるシステムです。

Symantec pcAnywhere には SMS との統合に必要な複数のサポートファイルがあります。このファイルは Symantec pcAnywhere の CD でのみ提供されます。

SMS へのパッケージ定義ファイルのインポート

Symantec pcAnywhere のパッケージ定義ファイル (pcAnywhere.pdf) には SMS との統合に必要なプログラム設定や他の製品固有情報が入っています。このファイルを SMS にインポートする必要があります。

このパッケージ定義ファイルは Symantec pcAnywhere CD 上の Tools フォルダにあります。

BackOffice サーバーを使ってアプリケーションをセットアップして配布する方法について詳しくは SMS のマニュアルを参照してください。

SMS にパッケージ定義ファイルをインポートするには

- 1 Symantec pcAnywhere CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 2 SMS 管理コンソールの左ペインで[パッケージ]を右クリックしてから[新規作成]、[定義からパッケージ]の順に選択します。
- 3 [定義に基づくパッケージの作成]ウィザードでパッケージファイルの名前を要求するメッセージが表示されたら[参照]をクリックして pcAnywhere.pdf ファイルを検索します。

Symantec pcAnywhere CD 上のデフォルトの場所は次のとおりです。

¥tools¥SMS フォルダ

- 4 [開く]をクリックします。
- 5 パッケージ定義パネルで[次へ]をクリックします。
- 6 ウィザードでのすべてのステップが完了したら[完了]をクリックします。

Microsoft DCOM について

DCOM は Distributed Component Object Model の略で、Symantec pcAnywhere はこの Microsoft DCOM 技術をリモート管理タスク中のすべてのポイントツーポイント通信に使用します。DCOM は pcAnywhere Host Administrator ツールや SMS 統合で使われます。

DCOM はさまざまなネットワークプロトコル上で動作しデフォルトではすべてのインストール済みプロトコル上で接続を試みます。ネットワークとの接続後は Windows NT の認証を使って必要なアクセス権を検証します。たとえば、適切なアクセス権のある管理者は任意の場所からロックした pcAnywhere ホスト上で管理タスクを実行できます。

NT 認証が pcAnywhere の DCOM 管理タスクに使われるようにするには同じドメインまたは信頼される側のドメインを使うように pcAnywhere 接続項目を設定してください。

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista での DCOM の実装

集中型管理ツールを使って Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista 上の **pcAnywhere** をリモートから設定して制御するには次のシステムの必要条件に従う必要があります。

- ドメイン管理者としてログオンする
- 管理者のコンピュータとクライアントのコンピュータの両方が同じドメイン内にある

DCOM 設定の修正

Symantec **pcAnywhere** はインストール処理中に **DCOM** を設定します。デフォルト設定で **pcAnywhere** 管理アプリケーションは正常に機能し十分なセキュリティを維持できるはずです。ただし、**DCOM** のデフォルトのセキュリティ設定を変更することにより管理者はシステムアクセスを許可または拒否できます。

管理下のコンピュータ上で **DCOM** セキュリティ設定を修正するには管理者のコンピュータ上で **DCOM** 設定を調整する必要があるかもしれません。管理下のすべてのコンピュータが同じ **Windows NT** ドメイン上または信頼される側のドメイン上で認証されているようにします。

リモートコンピュータに管理者接続をした場合、集中型管理ソフトウェアは接続をするユーザーの偽装を試みます。そのユーザーが管理者権限でログオンしていなければこの偽装は失敗します。

さらにセキュリティを保証するために、管理者権限のない呼び出し側が直接コンピュータにログオンした場合、管理者機能を実行したり通常の権限を超えてアクセスしたりはできません。

アクセス拒否エラーによる接続の問題を避けるには **dcomcnfg.exe** ユーティリティを実行してクライアントのセキュリティ設定を確認します。デフォルトのセキュリティを編集して、ホストへのアクセスが許可されているドメインユーザーまたは管理者のみを追加します。

詳しくは **dcomcnfg.exe** のオンラインマニュアルを参照してください。

DCOM 設定を修正するには

- ◆ Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista で **¥WinNT¥System32** フォルダを開いてから **dcomcnfg.exe** を実行します。

AwShim について

AwShim は **pcAnywhere** と集中型管理統合の間の橋渡しの役をする管理コンポーネントです。**pcAnywhere Host Administrator** ツールは **AwShim** を使ってホストやリモートのセッションを開始または中止します。それぞれの動作について特定のホスト設定ファイルまたはリモート設定ファイルを割り当てられます。

AwShim で使うパラメータ

- -A は動作を指定します (A は **Action** の略です)。
 - -B は BHF ファイルを指定します (B は BHF の略です)。
 - -C は CHF ファイルを指定します (C は CHF の略です)。
 - -H は動作を実行するホストを指定します (H は **HostName** の略です)。
 - -R は接続先のリモートコンピュータを指定します (R は **Remote** の略です)。
- A パラメータでサポートされる動作

- STARTHOST
- STARTREMOTE
- STOPHOST

-B パラメータと -C パラメータは **pcAnywhere** フォルダの **CMS** フォルダにあるホスト項目とホスト呼び出し項目を指定します。

-H パラメータは動作が実行されるホストコンピュータの名前またはアドレスを指定します。

-R パラメータは **STARTREMOTE** でのみ使われ、リモートの接続先ホストコンピュータの名前を指定します。リモートが起動すると **CHF** ファイルで指定されたすべての接続パラメータが必ず使われますが、ホストコンピュータのアドレスは例外です。このアドレスは -R パラメータで指定する必要があります。

管理下のコンピュータ上でパスワード保護された接続項目を実行すると、そのコンピュータ上にのみパスワードの確認メッセージが表示されます。パスワードの確認メッセージは管理者が動作を開始したコンピュータ上には表示されません。

集中型ログ記録について

セキュリティ、アカウント管理、ログ記録は分散コンピュータ環境で重要な問題です。**Symantec pcAnywhere** には集中型イベントログ記録をサポートする拡張ログ記録ユーティリティがあります。管理者はネットワーク上のすべての **pcAnywhere** ホストからログ記録情報を収集して安全な集中型サーバーにその情報を格納できます。

pcAnywhere Host Administrator ツールはネットワーク上のホストコンピュータからログファイルを取り込むことができます。管理者はログファイルをローカルに表示して処理できます。

Symantec pcAnywhere は **SNMP** コンソール上でのログ記録もサポートします。**SNMP** は **Simple Network Management Protocol** の略で、情報を記録する互換性のあるコンソールに **SNMPv1** トラップを送信するために使うプロトコルです。**Symantec pcAnywhere** には生成する **SNMP** イベントを格納する **MIB** (**Management Information Base** の略) があります。

SNMPトラップを使った処理効率の監視

SNMP はアダプタ、ルーター、ハブのようなネットワークデバイスや装置での活動を監視してログに記録するネットワーク監視プロトコルです。

この情報は MMC や SMS など、SNMPトラップをサポートするすべての管理コンソールに送信できます。イベントコンソールには通常、着信 SNMPトラップとそこに格納される変数に応じて動作をオートメーション化する方法があります。一般にルールまたは動作と呼ばれる自動動作の機能はそれぞれの集中型管理ツールで異なります。ほとんどがコマンドラインから実行できる任意のプログラムを起動するための機能を備えています。

p.66 の「[pcAnywhere MIB ファイルについて](#)」を参照してください。

SNMPトラップを使って処理効率を監視するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウの編集メニューで[環境設定]を選択します。
- 2 pcAnywhere オプションウィンドウの[イベントログ記録]ページで[SNMPトラップを有効にする]にチェックマークを付けます。

このページを見つけるには、左右の矢印をクリックしてページのリストをスクロールします。

- 3 どのコンピュータがログ記録情報を取り込むかを指定するために[追加]をクリックします。
- 4 SNMPトラップ送信先ウィンドウで IP アドレスを入力します。
追加したいコンピュータごとにこの処理を繰り返します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 ログに記録したいイベントを選択します。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

- 7 [OK]をクリックします。

pcAnywhere MIB ファイルについて

pcAnywhere MIB ファイルは pcAnywhere が生成できる SNMPトラップの概略を示します。pcAnywhere MIB ファイルはネットワーク上で起きる pcAnywhere イベントに対する自動応答を構築するのに役立つツールとして使います。

pcAnywhere MIB ファイルは次のディレクトリにあります。

¥Program Files¥Symantec¥pcAnywhere¥CMS¥pca_trap.mib

pcAnywhere とディレクトリサービスの統合

この章では以下の項目について説明しています。

- ディレクトリサービスについて
- **pcAnywhere** でのディレクトリサービスの使い方
- ディレクトリサーバーの設定
- ディレクトリサービスを使うための **pcAnywhere** の設定

ディレクトリサービスについて

pcAnywhere のディレクトリサービス機能はユーザーについての情報を取り込んで格納する LDAP (Lightweight Directory Access Protocol の略) クライアントアプリケーションの例です。インターネットまたはイントラネットで接続待ちのホストコンピュータを検索するのに役立ちます。

pcAnywhere でディレクトリサービスを使うと速度が向上するというメリットがあります。通常はリモート接続を起動するとネットワークをスキャンして待機中の **pcAnywhere** ホストの有無を調べます。これには時間がかかる場合があり、その結果はネットワークの規模とホストが別のサブネットにあるかどうかによって異なる場合があります。LDAP に登録済みのホストはリモートからの問い合わせに対してすぐに結果を提供します。

pcAnywhere でのディレクトリサービスの使い方

ディレクトリサービスではホストが起動して通常どおりに着信接続を待ちます。それと同時にホストは LDAP サーバーに接続し、現在の IP アドレス、コンピュータ名、ホストの現在の状態を格納する属性を追加してユーザーのエントリを更新します。

リモートが起動すると新しいアプリケーション (ディレクトリサービスブラウザ) が起動し LDAP サーバーに接続します。ディレクトリサービスブラウザはそのフィルタ基準を満たすすべてのエントリを問い合わせ、エントリをリストに表示します。このリストで接続先のホストを選択できます。

ディレクトリサーバーの設定

pcAnywhere でディレクトリサービスを使うにはその前にディレクトリサーバーを pcAnywhere と連携して働くように設定する必要があります。設定方法は使うディレクトリサーバーの種類によって異なります。

LDAP サーバーの設定

ディレクトリサービスを使うにはカスタムオブジェクトクラス記述を LDAP サーバーの設定に追加します。このカスタムオブジェクトクラスはユーザーが起動するホストごとに LDAP サーバーが格納しなければならない情報を記述します。カスタムオブジェクトクラスが利用可能になったら、既存のすべてのエントリを修正して新しいオブジェクトクラスに属す値を格納します。

pcAnywhere のカスタムオブジェクトクラスは **pcaHost** でなければならない、**pcaHostEntry** という **binary** 属性を 1 つだけ格納している必要があります。

次に例を示します。

```
objectclass:pcaHost  
pcaHostEntry:binary
```

Windows Active Directory の設定

Windows 2000 の Active Directory 用に pcAnywhere を設定するにはその前に Active Directory が搭載された Windows 2000 サーバーをインストールして設定する必要があります。

pcAnywhere に Windows Active Directory を実装するにはサーバーのスキーマを拡張する必要があります。この処理には次のタスクがあります。

- スナップインの追加
- **pcaHostEntry** 属性の作成
- **pcaHost** オブジェクトの作成
- **pcaHost** オブジェクトの関連付け
- ユーザーの権利の設定

このタスクを実行するにはサーバーに対する管理者の権利が必要です。

スナップインの追加

MMC にスナップインを追加するには次の手順に従います。

スナップインを追加するには

- 1 Windows スタートメニューで[ファイル名を指定して実行]を選択します。
- 2 「mmc」と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 コンソールのツールバーのコンソールメニューで[スナップインの追加と削除]を選択します。
- 5 [スナップインの追加と削除]ダイアログボックスで[追加]をクリックします。
- 6 [Active Directory スキーマ]を選択してから[追加]をクリックします。
- 7 [スタンドアロン ナップインの追加]ダイアログボックスを閉じます。
- 8 [スナップインの追加と削除]ダイアログボックスで[OK]をクリックします。
- 9 左ペインで[Active Directory スキーマ]を右クリックしてから[操作マスタ]を選択します。
- 10 [このドメインコントローラでスキーマの修正が可能]を選択します。
- 11 [OK]をクリックします。

pcaHostEntry 属性の作成

pcaHostEntry 属性を作成するには次の手順に従います。

pcaHostEntry 属性を作成するには

- 1 左ペインで[Active Directory スキーマ]項目を展開します。
ここでクラスサブフォルダと属性サブフォルダが利用可能になります。
- 2 属性フォルダを右クリックしてから[属性の作成]を選択します。
表示される警告メッセージは無視します。
- 3 [一般名]入力フィールドに「pcaHostEntry」と入力します。
名前は大文字と小文字が区別されます。
- 4 [LDAP 表示名]フィールドに「pcaHostEntry」と入力します。
- 5 [一意な X500 オブジェクト ID]フィールドに次のように入力します。
1.3.6.1.4.1.393.100.9.8.1
- 6 [構文]リストで[オクテット文字列]を選択します。
- 7 [複数値]を選択します。

- 8 [OK]をクリックします。
- 9 左ペインでクラスフォルダを右クリックしてから[クラスの作成]を選択します。
警告メッセージは無視します。

pcaHost オブジェクトの作成

pcaHost オブジェクトを作成するには次の手順に従います。

pcaHost オブジェクトを作成するには

- 1 [一般名]入力フィールドに「pcaHost」と入力します。
名前は大文字と小文字が区別されます。
- 2 [LDAP 表示名]フィールドに「pcaHost」と入力します。
- 3 [一意な X500 オブジェクト ID]フィールドに次のように入力します。
1.3.6.1.4.1.393.100.9.8.2
- 4 [親クラス]フィールドに「Top」と入力します。
- 5 [クラスの種類]リストで[補助型]を選択します。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [新しいスキーマクラスの作成]ダイアログボックスで[オプション]フィールドの右の[追加]ボタンをクリックします。
- 8 [pcaHostEntry]属性を選択します。
- 9 [OK]をクリックします。
[pcaHostEntry]がオプションの属性として表示されます。
- 10 [完了]をクリックします。

pcaHost オブジェクトとユーザーオブジェクトクラスの関連付け

pcaHost オブジェクトをユーザーオブジェクトクラスに関連付けるには次の手順に従います。

pcaHost オブジェクトをユーザーオブジェクトクラスに関連付けるには

- 1 コンソールの左ペインでクラスフォルダを展開します。
- 2 [user]オブジェクトクラスを右クリックしてから[プロパティ]を選択します。
- 3 [関係]ページを表示して[補助型クラス]フィールドの右の[追加]ボタンをクリックします。
- 4 [pcaHost]オブジェクトクラスを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

- 6 [適用]をクリックします。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 左ペインで[Active Directory スキーマ]を右クリックします。
- 9 [スキーマの再読み込み]を選択します。

pcAnywhere ユーザーの権利の設定

pcAnywhere ユーザーの権利を設定する場合、まず表示権を設定してから編集権を設定する必要があります。

ユーザーの表示権を設定するには

- 1 Windows のスタートメニューで[プログラム]、[管理ツール]、[Active Directory ユーザーとコンピュータ]の順に選択します。
- 2 表示メニューで[詳細設定]が選択されていることを確認します。
プロパティの[セキュリティ]タブが有効になります。
任意の組織単位つまり部署で次の権利を設定できます。pcAnywhere ユーザーを含むレベルで権利を設定してください。
- 3 組織単位を右クリックしてから[プロパティ]を選択します。
- 4 [セキュリティ]タブで[追加]をクリックします。
- 5 [Everyone]グループを選択します。
- 6 [追加]をクリックします。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 [許可]列で[読み取り]を選択します。
- 9 組織単位のプロパティで[詳細設定]をクリックします。
- 10 追加した[Everyone]グループを選択します。
- 11 [表示/編集]をクリックします。
- 12 [オブジェクト]タブの[適用先]リストで[このオブジェクトとすべての子オブジェクト]を選択します。
- 13 [セキュリティ]プロパティが閉じるまで[OK]をクリックします。

ユーザーの編集権の設定

ユーザーの編集権を設定するには次の手順に従います。

ユーザーの編集権を設定するには

- 1 組織単位の[セキュリティ]タブで[追加]をクリックします。
- 2 [Self]グループを選択します。
- 3 [追加]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [許可]列で[書き込み]を選択します。
- 6 [詳細]をクリックします。
- 7 追加した[Self]グループを選択してから[表示/編集]をクリックします。
- 8 [オブジェクト]タブの[適用先]リストで[子オブジェクトのみ]を選択します。
- 9 [セキュリティ]プロパティが閉じるまで[OK]をクリックします。

ディレクトリサービスを使うための pcAnywhere の設定

ディレクトリサービスを使うように pcAnywhere を設定するには次の処理が必要です。

- すべての接続項目が同じ設定を使うように pcAnywhere 環境設定でディレクトリサービスを設定する
Vista では、pcAnywhere 設定でディレクトリサービスを追加するには管理者権限が必要です。標準ユーザーには管理者の信用証明を要求するメッセージが表示されません。
- ホスト接続項目用にディレクトリサービスを設定する
- リモート接続項目用にディレクトリサービスを設定する

pcAnywhere でのディレクトリサービスの設定

この手順を始める前にディレクトリサーバーのエントリを設定してください。

pcAnywhere でディレクトリサービスを設定するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウの編集メニューで[環境設定]を選択します。
- 2 pcAnywhere オプションウィンドウの[ディレクトリサービス]ページで[追加]をクリックします。
- 3 [表示名]フィールドにディレクトリサーバーを明確に表す名前を入力します。
- 4 [ディレクトリサーバー]フィールドにディレクトリサーバーのホスト名または IP アドレスを入力します。
- 5 [名前]フィールドにディレクトリサーバー上で指定したアカウント名を入力します。

- 6 [パスワード]フィールドにアカウントの権限を確認するパスワードを入力します。
パスワードは大文字と小文字を区別します。
- 7 [拡張]をクリックしてディレクトリツリーのポート番号と検索基点を設定します。
この情報は必ず設定してください。ポート番号はクライアントからの問い合わせを受け入れるためにディレクトリサーバーが使うポートを指定します。デフォルトのポートは 389 です。検索基点は問い合わせ検索を開始するディレクトリ構造のルートです。
- 8 [OK]をクリックします。

pcAnywhere はディレクトリサーバーに接続して[名前]フィールドに指定されたエントリの検索を試みます。複数のエントリが見つかった場合にはユーザーが 1 つを選択する必要があります。エントリが識別されると pcAnywhere はその識別名をレジストリに格納して見分けやすくし、そのエントリに[確認済み]のラベルを付けます。

検証に失敗する一般的な理由にはネットワーク接続の解除、不正な TCP/IP 設定、不正なユーザー名またはパスワード、サーバー上にユーザー情報を設定していないことなどがあります。

ディレクトリサービスを使うためのホストコンピュータの設定

ディレクトリサービスを使うようにホスト接続を設定した場合、ホスト接続を起動すると pcAnywhere は指定された共通名をディレクトリサーバーで検索します。対応するエントリを見つけるとホストの接続情報と現在の状態で更新します。

状態が変化した場合、ホストはリモートコンピュータに現在の状態がわかるようにディレクトリサーバーにあるそのエントリを更新します。ホストは中止されるとホストユーザーのエントリをリセットします。

この手順を始める前にディレクトリサーバーのエントリを設定してください。

ディレクトリサービスを使うようにホストコンピュータを設定するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウで[ホスト]をクリックします。
- 2 ネットワーク接続を使うホスト接続項目を右クリックしてから[プロパティ]を選択します。
- 3 [設定]ページで[ディレクトリサービスを使う]にチェックマークを付けます。
- 4 リストで適切なディレクトリサーバーを選択します。
選択したディレクトリサーバーは起動時にホストを登録するために使われます。
- 5 [OK]をクリックします。

ディレクトリサービスを使うためのリモートコンピュータの設定

ディレクトリサービスを使うようにリモート接続を設定した場合、リモートはディレクトリサーバーで待機中のホスト接続を検索します。この手順を始める前にディレクトリサーバーのエントリを設定してください。

ディレクトリサービスを使うようにリモートコンピュータを設定するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウで[リモート]をクリックします。
- 2 ネットワーク接続を使うリモート接続項目を右クリックしてから[プロパティ]を選択します。
- 3 [設定]ページで[ディレクトリサービスを使う]にチェックマークを付けます。
- 4 リストでディレクトリサーバーを選択します。
このリストには事前設定済みの確認されたディレクトリサーバーのみ表示されます。
- 5 初期のフィルタを設定するには[フィルタ]をクリックします。
[フィルタの設定]ダイアログボックスは結果を絞り込みます。フィールドの一部または全部にデータを入力します。その基準に一致するエントリのみが返されます。このフィールドにはワイルドカード文字が使えます。たとえば、A*では文字Aで始まる名前のエントリが返されます。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 [設定]ページで[OK]をクリックします。

Symantec pcAnywhere でのセキュリティの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [pcAnywhere ホストへのアクセスの制御](#)
- [セッションセキュリティの保護](#)
- [監査証拠の保守](#)
- [ポリシーベースの管理の実装](#)

pcAnywhere ホストへのアクセスの制御

コンピュータ環境を保全する最初のステップはネットワークに対するリモートアクセスを制御することです。管理者はネットワークインフラへの外部からの侵入ポイントの数を限定する必要があります。この目的を達成するにはリモートアクセスに利用可能なネットワークホストの数を限定し、個々のダイヤルアップデバイスの代わりに安全なソリューションの RAS や VPN を実装します。

次に示すのは **pcAnywhere** ホストへのアクセスを制御するために **pcAnywhere** で利用できる方法の一部です。

- 特定のコンピュータ名または IP アドレスに接続を限定する
p.76 の「[特定のコンピュータ名または IP アドレスに接続を限定する](#)」を参照してください。
- **pcAnywhere** インストールにシリアル番号を割り当てる
Symantec pcAnywhere ではセキュリティコードつまりシリアル番号を埋め込んだカスタムインストールパッケージを作成できます。接続するためにはこのシリアル番号がホストコンピュータとリモートコンピュータの両方に存在する必要があります。
p.20 の「[pcAnywhere インストールへのシリアル番号の割り当て](#)」を参照してください。

■ 認証方法を実装する

Symantec pcAnywhere はいろいろな種類の集中型認証 (Active Directory、スマートカード、NT、RSA SecurID など) をサポートします。したがって、ネットワーク上にすでに用意されている認証対策を柔軟に利用できます。

p.77 の「[pcAnywhere での集中型認証の活用](#)」を参照してください。

■ ログインの再試行回数を限定する

リモートユーザーがホストコンピュータに対し連続してログオンの試みができる回数を限定するとハッカーやサービス拒否攻撃から保護するのに役立ちます。限度に達するまでにリモートユーザーが正常にログオンを完了できないと Symantec pcAnywhere は接続を終了します。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

■ ログイン入力の時間を制限する

リモートユーザーがホストコンピュータに正常にログオンを完了するまでの時間を制限するとハッカーやサービス拒否攻撃から保護するのに役立ちます。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

■ 接続時の確認をする

このオプションを有効にした場合、pcAnywhere は誰かが接続しようとしていることをホストユーザーに通知します。ホストユーザーにはその接続を許可または拒否するオプションが用意されています。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

特定のコンピュータ名または IP アドレスに接続を限定する

指定した TCP/IP アドレスの特定のサブネットまたは範囲内に入る接続のみ受け入れるようにホストを設定して pcAnywhere ホストへの外部からの接続を遮断します。ファイアウォールの外部のリモートユーザーは指定したアドレス範囲に含まれるセキュアトンネルまたは VPN を通って接続する必要があります。

経験豊かなハッカーは有効な IP アドレスの詐称または盗用によってこの対策を巧みに逃れることがあります。セキュリティを最高にするためにこの機能はシリアル番号の割り当て機能と組み合わせて使ってください。

特定のコンピュータ名または IP アドレスに接続を限定するには

- 1 pcAnywhere マネージャウィンドウの編集メニューで[環境設定]を選択します。
- 2 pcAnywhere オプションウィンドウの[ホスト通信]ページの[次の名前または IP アドレスに接続を限定する]で許可したい接続元のリモートユーザーのコンピュータ名または IP アドレスを入力します。
- 3 [制限の追加]をクリックします。
- 4 許可したい接続元のコンピュータ名または IP アドレスごとに 2 と 3 を繰り返します。
- 5 [OK]をクリックします。

pcAnywhere での集中型認証の活用

Symantec pcAnywhere ではホストコンピュータに接続するリモートユーザーごとまたはリモートユーザーグループごとに呼び出し側のログオンアカウントを作成し、ユーザーの ID を確認するための認証方法の選択を要求する必要があります。この情報は権限のないアクセスを防止するためにすべてのホストセッションに必要です。

Symantec pcAnywhere はいろいろな種類の集中型認証 (Active Directory、スマートカード、NT、RSA SecurID など) をサポートします。したがって、ネットワーク上にすでに用意されている認証対策を柔軟に利用できます。

二要素認証の使い方

Symantec pcAnywhere は RSA SecurID という二要素認証をサポートします。SecurID はセキュリティコードに対しユーザーの有効性を確認します。セキュリティコードは認証符号とユーザー提供の PIN によって生成されます。

RSA ACE/Server と Agent をネットワーク上に正しくインストールして設定しておく必要があります。

詳しくは RSA 社の次の Web サイトを参照してください。

<http://www.rsasecurity.com/japan/>

pcAnywhere で SecurID を実装するには次の操作をする必要があります。

- ホストコンピュータに RSA ACE/Agent をインストールして設定する
詳しくは RSA 社が提供するマニュアルを参照してください。
- ホストコンピュータ上で pcAnywhere を開いて SecurID 認証を使うようにホスト接続項目を設定する
詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

SecurID 認証を使うホストコンピュータにリモートユーザーが接続を試みるとそのリモートユーザーに認証信用証明 (PIN 番号、ログイン名、パスワード) の入力进行要求するメッセージが表示されます。

ホストコンピュータはリモートコンピュータと RSA ACE/Agent (ホストコンピュータにインストールされる) 間のデータ要求を扱います。RSA ACE/Agent はホストコンピュータと RSA ACE/Server 間のデータ要求を扱います。

リモートユーザーが提供するトークンコードがサーバーのクロックと同期していないか信頼性が低いように見える場合、別のトークンコードの入力进行要求するメッセージが表示されます。この次のトークンコードは SecurID 認証符号によって生成されます。リモートユーザーは続行する前にこのトークンコードを待つ必要があります。

メモ: RSA SecurID 認証を使うにはホストコンピュータとリモートコンピュータが pcAnywhere 11.0.x 以降を実行している必要があります。

Microsoft Windows ベースの認証の種類の使い方

Microsoft Windows ベースのプラットフォームに利用可能な認証の種類についての情報を表 6-1 に示します。

表 6-1 Microsoft Windows ベースの認証の種類

Microsoft Windows ベースの認証の種類	説明	pcAnywhere での実装
ADS (Windows 2000/XP)	ADS (Active Directory Services の略) に格納されるリストを検査してユーザーまたはグループの有効性を確認します。	ユーザーは ADS ツリーでユーザー名またはグループ名を参照できます。
Microsoft LDAP	LDAP 3.0 準拠のディレクトリサービスに格納されるユーザーリストを検査してユーザーまたはグループの有効性を確認します。	ユーザーは LDAP サーバーにログオンする必要があり、その後でユーザー名を参照できます。
NT (Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista)	ワークステーションまたはユーザーのドメインのリストを検査してユーザーまたはグループの有効性を確認します。	Windows NT のユーザーはドメインリストでユーザー名またはグループ名を参照できます。
Windows	Microsoft ネットワーク共有ディレクトリを検査してユーザーまたはグループの有効性を確認します。	

グローバルユーザー用の Windows NT 認証の設定

Symantec pcAnywhere ではローカルグループに含まれる任意のグローバルグループとローカル管理者ユーザーグループからの呼び出し側をサポートするように NT 認証を使ってサーバーを設定できます。

この機能を使うとドメインアカウントをローカル管理者グループに追加することによって社内のすべての管理者用の呼び出し側アカウントをサーバー上に設定できます。この設定オプションは管理者ごとの個々のアカウントをローカル管理者グループに追加するのに比べ時間がかかりません。

この機能は Windows NT 認証にのみサポートされます。

グローバルユーザー用に Windows NT 認証を設定するには

- 1
- pcAnywhere マネージャウィンドウの左のナビゲーションバーで[ホスト]をクリックします。
- 2
- 次のいずれかの操作をします。

■

新しい接続項目を追加するにはファイルメニューで[新しい項目]、[拡張]の順に選択します。

■

既存の接続項目を修正するには右ペインの[ホスト]で接続項目を右クリックしてから[プロパティ]を選択します。
- 3
- ホストプロパティウィンドウの[呼び出し側]ページの[認証の種類]で[NT]を選択します。
- 4
- 次のいずれかの操作をします。

■

新しい呼び出し側を追加するには[呼び出し側リスト]で新しい項目アイコンをクリックします。

■

既存の呼び出し側を修正するには[呼び出し側リスト]で名前をダブルクリックします。
- 5
- 呼び出しプロパティウィンドウの[識別]ページで[グローバル NT ユーザーとローカル NT グループで定義したグループをサポートします]にチェックマークを付けます。
- 6
- [OK]をクリックします。

Web ベースの認証の種類の使い方

利用可能な Web ベースの認証方法についての情報を表 6-2 に示します。

表 6-2 Web ベースの認証の種類

Web ベースの認証の種類	説明	pcAnywhere での実装
FTP	FTP サーバー上で実行中のホストが FTP サービスと関連のあるユーザーリストを検査してユーザーの有効性を確認できます。ユーザー名とパスワードはネットワーク上でクリアテキストの形式で送信されます。	ユーザーはサーバー名と有効なユーザー名を指定する必要があります。

Web ベースの認証の種類	説明	pcAnywhere での実装
HTTP	HTTP Web サーバー上で実行中のホストが HTTP サービスと関連のあるユーザーリストを検査してユーザーの有効性を確認できます。ユーザー名とパスワードはネットワーク上でクリアテキストの形式で送信されます。	ユーザーはサーバー名と有効なユーザー名を指定する必要があります。
HTTPS	HTTPS Web サーバー上で実行中のホストが HTTPS サービスと関連のあるリストを検査してユーザーの有効性を確認できます。 ネットワーク上で送信する前にユーザー名とパスワードが暗号化されるので、この認証方法は FTP や HTTP よりも安全です。	ユーザーはサーバー名と有効なユーザー名を指定する必要があります。
Netscape LDAP	LDAP 3.0 準拠のディレクトリサービスに格納されるリストを検査してユーザーの有効性を確認します。	ユーザーは LDAP サーバーにログオンする必要があり、その後でユーザー名を参照できます。

セッションセキュリティの保護

Symantec pcAnywhere にはセッションのプライバシーを保護し、ホストセッションに干渉する可能性のある特定のタスクをユーザーが実行できないように防止するオプションが用意されています。このセキュリティ対策は追加のセキュリティ層になりますが、pcAnywhere の強力なセキュリティ機能と組み合わせると最も効果的です。このような対策に含まれる認証と暗号化は権限のないアクセスや意図的なサービスの中断からホストを保護するために設計されています。

pcAnywhere でセッションセキュリティを保護できる方法についての情報を表 6-3 に示します。

表 6-3 セッションセキュリティのオプション

オプション	説明
強力な暗号化	強力な暗号化を使うことによって権限の認証処理を含めてデータストリームを盗聴やハッカーの攻撃から保護します。Symantec pcAnywhereは強力な暗号化の種類として公開キー暗号化と対称キー暗号化をサポートします。 pcAnywhere 11.0.x以前を実行中のホストまたはリモートとの接続時には、いずれのユーザーも相手が低い暗号化レベルを使っているときに接続を拒否できます。接続が拒否されない場合、pcAnywhereは暗号化レベルが高いコンピュータの設定を低い方のコンピュータに合わせて自動的に下げます。 ホストとリモートの両方が pcAnywhere 11.5以降を実行中の場合には、pcAnywhereは暗号化レベルが低いコンピュータの設定を高い方のコンピュータに合わせて自動的に上げます。
ログオン暗号化	Symantec pcAnywhereは対称キー暗号化を使ってユーザーIDとパスワードを暗号化することによってログオン情報を自動的に保全します。 ログオン情報は対称キー暗号化を使わない設定の以前のバージョンのpcAnywhereをホストまたはリモートが使う場合には暗号化されないことがあります。
セッションの活動なし時間限度	指定した時間限度内にキーボードの入力もマウスの入力もなかった場合に接続解除するようにホストを設定することによってセッションを終了するのをうっかり忘れるユーザーからホストを保護します。
呼び出し側ごとの権限	適用可能な場合に呼び出し側がホストにアクセスするレベルを限定します。pcAnywhereではホストコンピュータの再起動またはシャットダウン、ホストとのファイル転送、ホストの中止、マウスやキーボードの使用など、ホスト上での特定の機能の実行をユーザーに許可したくない場合に制限できます。
ユーザーまたはユーザーグループごとの時間限度	セッションに時間限度を設定して指定した長さの活動なしの後でセッションを自動的に終了するようにホストを設定することによってサービスを中断する悪意のあるユーザーとセッションを終了するのをうっかり忘れる悪意のないユーザーからホストを保護します。このオプションは呼び出し側のレベルで設定されます。

オプション	説明
安全なセッションの終了オプション	潜在的なセキュリティ違反から保護するためにホストセッションを安全に終了します。セッションの異常終了と正常終了とで異なる方法の扱いができます。 次のように設定ができます。 ■ ホストを中止するか続行して接続を待つ ■ ホストユーザーをログオフする ■ ホストコンピュータを再起動する ■ コンピュータをロックする

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

Windows Vista/Server 2008 で公開キー暗号化を使う pcAnywhere の設定

ユーザーは Vista/Server 2008 に管理者としてログオンできますが、すべてのアプリケーションは標準ユーザーの権限で実行されます。ホストがサービスとして実行される設定の場合、ホストはコンピュータのストアで証明書を探します。標準ユーザーにはコンピュータの証明書ストアへのアクセス権がないので、[ホストプロパティ]の[暗号]ページには秘密キーが表示されません。この場合に、公開キー暗号化を設定するには、次のいずれかの操作をします。

- デスクトップアイコンを右クリックしてから[管理者として実行]をクリックして管理者として **pcAnywhere** を起動します。[公開キーの暗号化]とホストのプロパティで[サービスとして実行]を設定します。
- 標準ユーザーとして **pcAnywhere** を起動してから、ホストのプロパティで[サービスとして実行]を選択して[公開キーの暗号化]を設定します。

監査証跡の保守

イベントログ記録機能は監査の目的でセッション活動を監視して情報を追跡するのに役立ちます。ホストに接続したユーザー、セッションの継続時間のほか、認証またはログオンの失敗などの重要なセキュリティ情報も追跡できます。

動作環境に応じてセッション中に起きたイベントについての情報は **pcAnywhere** が生成するログファイル、Windows のイベントログ、SNMP コンソールのいずれかに送信できます。Symantec pcAnywhere は集中型ログ記録をサポートするので安全な中央サーバーにログのアーカイブファイルを保存できます。

Symantec pcAnywhere では、チャットログをローカルディレクトリに保存できます。ログ記録は便利なツールですが、追跡するイベントの種類によっては処理速度が低下するこ

とがあります。ログファイルを定期的にアーカイブファイルとして保存することも忘れないようにしてください。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

ポリシーベースの管理の実装

管理者はポリシーベースの集中型管理によって pcAnywhere の外観と動作を安全にカスタマイズできます。Symantec pcAnywhere は Windows 2000/2003 Server/XP/Vista/Server 2008 のグループポリシーをサポートします。

Windows 2000/2003 Server/XP/Vista/Server 2008 でポリシー設定を修正するには管理者権限が必要です。

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista でのグループポリシーの実装

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista でグループポリシーを管理するには MMC のグループポリシースナップインを使う必要があります。サイト、ドメイン、組織単位のポリシーを管理するには **Active Directory** でグループポリシーを開いてからグループポリシーオブジェクトを適切な **Active Directory** コンテナにリンクしてください。オペレーティングシステムにはこの処理を案内するソフトウェアウィザードがあります。

MMC へのグループポリシースナップインの追加について詳しくはオペレーティングシステムのオンラインマニュアルを参照してください。

Symantec pcAnywhere はポリシー設定を管理用テンプレートに定義します。グループポリシースナップインを MMC に追加した後で **pcAnywhere.adm** ファイルを MMC にインポートする必要があります。

p.83 の「[pcAnywhere 管理用テンプレートのインポート](#)」を参照してください。

pcAnywhere 管理用テンプレートのインポート

Symantec pcAnywhere はレジストリベースのポリシー管理をサポートするために Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista 用の管理用テンプレートを提供します。pcAnywhere.adm ファイルは pcAnywhere の特定コンポーネントのポリシー設定を定義します。この設定はレジストリのキーと値、レジストリ設定の書き込み先の場所、その他の説明の情報を含みます。

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista 用の pcAnywhere.adm ファイルのインポート

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista 用の pcAnywhere.adm ファイルは Symantec pcAnywhere CD 上の Tools¥Policy フォルダにあります。このファイルを安

全な場所にコピーしてから MMC にインポートできます。このファイルをインポートする前にグループポリシースナップインを MMC に追加済みであることを確認してください。

グループポリシースナップインを MMC に追加する方法について詳しくはオペレーティングシステムのオンラインマニュアルを参照してください。

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista 用の pcAnywhere.adm ファイルをインポートするには

- 1 Windows のスタートメニューで[ファイル名を指定して実行]を選択してから次のように入力します。

`gpedit.msc`
- 2 コンソールウィンドウの左ペインでポリシーを設定したいグループポリシーオブジェクトを選択します。
- 3 グループポリシーオブジェクトで[管理用テンプレート]を右クリックしてから[テンプレートの追加と削除]を選択します。
- 4 テンプレートの追加と削除ウィンドウで[追加]をクリックします。
- 5 pcAnywhere.adm ファイルの場所を参照してそのファイルを選択してから[開く]をクリックします。
- 6 テンプレートの追加と削除ウィンドウで[閉じる]をクリックします。

ユーザーポリシーの管理

Symantec pcAnywhere ではユーザーがユーザーインターフェースの特定の部分にアクセスできるか、pcAnywhere の特定の機能を実行できるかを制御できます。

pcAnywhere で制御できるポリシーの設定についての情報を表 6-4 に示します。

表 6-4 pcAnywhere ポリシー設定の場所

フォルダ	説明
動作	ユーザーが次の操作をすることを禁止するポリシー設定があります。 ■ pcAnywhere のメインユーザーインターフェースである pcAnywhere マネージャウィンドウを起動する ■ ホストオブジェクトを起動してホストセッションを開始する ■ リモートオブジェクトを起動してホストコンピュータに接続する ■ 実行中のホストコンピュータを中止する ■ セッション中にホストコンピュータのキーボードまたはマウスを使う ■ 製品の更新版をダウンロードするために LiveUpdate を使う ■ 製品をオンラインで登録する ■ チャットセッションを開始する ■ ファイル転送とコマンドキューの機能を使う
動作¥pcAnywhere ツール	ユーザーが pcAnywhere の次のツールを使うことを禁止するポリシー設定があります。 ■ パッケージ配備ツール ■ pcAnywhere Host Administrator ■ 活動ログの処理
動作¥リモート管理	ユーザーがすべてのリモート管理機能を使うことまたは個々の機能を使うことを禁止するポリシー設定があります。
UI Changes¥ホストオブジェクト	ユーザーが次の操作をすることを禁止するポリシー設定があります。 ■ ホストオブジェクトを編集する ■ ホストオブジェクトを作成する ■ ホストオブジェクトのフォルダの場所を変更する ■ 特定のプロパティを表示または編集する ■ ホストコンピュータの識別に使われるホスト名をカスタマイズする

フォルダ	説明
UI Changes¥リモートオブジェクト	ユーザーが次の操作をすることを禁止するポリシー設定があります。 ■ リモートオブジェクトを編集する ■ リモートオブジェクトを作成する ■ リモートオブジェクトのフォルダの場所を変更する ■ 特定のプロパティを表示または編集する
UI Changes¥オプションセット	ユーザーが次の操作をすることを禁止するポリシー設定があります。 ■ オプションセットオブジェクトと全体の pcAnywhere 設定を編集する ■ オプションセットオブジェクトを作成する ■ オプションセットオブジェクトのフォルダの場所を変更する ■ オプションセットと全体の pcAnywhere 設定の特定のプロパティを表示または編集する
UI Changes¥デバイスの可視性	特定のデバイスの種類(たとえば、赤外線や TAPI)を利用可能な接続の種類のリストから削除するポリシー設定があります。
UI Changes¥ヘルプ	ヘルプメニューで[サービスとサポートの情報]を選択した場合にカスタム URL を使えます。

Windows 2000/2003 Server/XP/Vista/Server 2008 でのユーザーポリシーの管理

Windows 2000/2003/Server 2008/XP/Vista でユーザーポリシーを管理するにはグループポリシースナップインと一緒に MMC を実行する必要があります。適切な pcAnywhere 管理用テンプレートをインポート済みであることを確認してください。

p.83 の「[pcAnywhere 管理用テンプレートのインポート](#)」を参照してください。

Windows 2000/2003 Server/XP/Vista/Server 2008 でユーザーポリシーを管理するには

- 1 Windows のスタートメニューで[ファイル名を指定して実行]を選択してから次のように入力します。
gpedit.msc
- 2 コンソールウィンドウの左ペインでポリシーを設定したいグループポリシーオブジェクトを選択します。

- 3 コンソールウィンドウの左ペインで管理したいグループポリシーオブジェクトの左にある正符号 (+) をクリックしてリストを展開します。
- 4 [ユーザーの構成] で [管理用テンプレート] の左にある正符号 (+) をクリックしてリストを展開します。
- 5 [Symantec pcAnywhere] の左にある正符号 (+) をクリックしてリストを展開します。
- 6 編集したいポリシー設定が入ったフォルダを開きます。
p.84 の「[ユーザーポリシーの管理](#)」を参照してください。
- 7 右ペインの [ポリシー] で編集したいポリシー設定をダブルクリックします。
- 8 プロパティウィンドウの [ポリシー] タブで次のいずれかを選択します。

[有効]	ポリシーを設定します。通常はユーザーがタスクを表示または実行することを防止します。
[無効]	ポリシーを設定解除します。通常はユーザーがタスクを表示または実行することを許可します。
- 9 [OK] をクリックします。

記号

.bhf ファイル 18、60
.chf ファイル 18、59
.cif ファイル 18、60
.cqf ファイル 18
.SID ファイル 21

A

ACE/Agent。「SecurID」を参照
ACE/Server。「SecurID」を参照
Active Directory Services 68
Admin.bhf 59
Admin11.chf 59
AwShim 64
awshim.exe 64

D

DCOM
概要 63
セキュリティ設定の修正 64
必要条件
Windows 2000/2003
Server/XP/Vista/Server 2008 64
dcomcnfg.exe ファイル 64

F

Files.ini ファイル 42～43

I

IP アドレス
接続の限定 76

L

LiveUpdate 28

M

MIB 66
Microsoft Management Console。「MMC」を参照

MMC

Host Administrator スナップインの追加 57
グループポリシースナップイン 83
コンピュータの追加 58
設定グループの作成 58
ポリシーの管理 86

N

NetWare ログオンスクリプト
テスト 54
パッケージの配備 52
NT 認証 78

P

Packager。「Symantec Packager」を参照
pcAnywhere.adm ファイル 84
pcAnywhere Host Administrator
AwShim を使う 64
MMC への追加 57
インストール 56
コマンドの送信 62
コンピュータの追加 58
接続項目のテンプレート 58
設定グループの作成 58
設定グループへのコンピュータの追加 58
設定ファイルの配布 61
ホスト項目の設定 61
ホストの管理 62
pcAnywhere ツール
pcAnywhere Host Administrator 55

S

SecurID 77
SMS
AwShim を使う 64
MIB を使う 66
パッケージ定義ファイルのインポート 63
パッケージの配備 47
SNMP トラップ 82
ログ記録 66

Start.htm ファイル 42

Symantec Packager

移行とアップグレード 9

処理の概要 12

製品設定のカスタマイズ 14

製品モジュールのインポート 14

必要条件 12

Symantec pcAnywhere

移行とアップグレード 7

設定ファイルの場所 18

T

TCP/IP

接続の限定 76

W

Web サーバー

インストールファイルのコピー 38

設定 39

Web ベースの認証 79

Windows Active Directory 68

あ

アップグレード

説明 7

移行

概要 7

パッケージ 8～9

依存関係

表示 31

イベントログ記録 82

SNMPトラップ 66

自動応答の構築 66

集中型サーバー 65

インストールオプション

インストールパッケージ 31

カスタム製品 25

インストールファイル。「パッケージ」を参照

エイリアス 46

オプションセット

概要 22

パッケージへの追加 24

ローカルコンピュータへの適用 25

か

カスタムインストール。「パッケージ」を参照

カスタムコマンド

概要 29

パッケージ定義への追加 31

管理用テンプレート 83

競合

表示 31

グループポリシー 83

公開キー暗号化

Vista/Server 2008 での設定 82

コマンドキューファイル 18

コマンド設定ファイル。「カスタムコマンド」を参照

コンピュータ名

接続の限定 76

さ

集中型サーバー

イベントログ記録 65

使用許諾契約

Symantec Packager 11

シリアル ID

生成 21

パッケージへの追加 21

整合性管理 19

製品設定ファイル

パッケージ定義への追加 31

ビルド 15

製品定義ファイル

ビルド 32

製品の必要条件 31

製品モジュール

インポート 14

セキュリティコード

生成 21

パッケージへの追加 21

接続項目

ホスト 27

リモート 27

接続項目ファイル

ホスト 18

リモート 18

設定グループ 58

設定ファイル

配布 61

パッケージへの追加 17

た

ディレクトリサービス

設定

LDAP サーバー 68

pcAnywhere での設定 72

- Windows Active Directory 68
 - ホストコンピュータの設定 73
 - リモートコンピュータの設定 74
- テンプレート
 - pcAnywhere Host Administrator 59

な

認証

- Microsoft Windows ベース 78
- Web ベース 79
 - グローバルユーザー用 78
- 集中型認証 77
- 二要素認証 77
- ネットワーク接続
 - 接続の限定 76

は

配備

- NetWare ログオンスクリプトを使う 52
- SMSを使う 47
- Web ベース 37
- Windows ログオンスクリプトを使う 49
- テスト 45
- ファイルのカスタマイズ 41
- パッケージ
 - オプションセットの設定 22
 - カスタムコマンドの追加 29
 - シリアル番号の割り当て 20
 - 整合性の実証 19
 - 製品インストールオプションの設定 25
 - 製品設定
 - インストールディレクトリ 26
 - 製品の更新 28
 - ホストテンプレート 27
 - 保存 29
 - リモートテンプレート 27
 - 製品設定のカスタマイズ 14
 - 製品の依存関係 16
 - 設定ファイルを含める 17
 - 定義 30
 - テスト 33
 - 配備
 - SMSを使う 47
 - Web ベース 37
 - テスト 45
 - ビルド 33
- パッケージ定義ファイル
 - SMS へのインポート 63

- カスタムコマンドの追加 31
- 製品の追加 31
- 製品の必要条件の表示 31
- ビルド 33
- ホストコンピュータ
 - 接続の限定 76
 - 保全 75
- ホストセッション
 - 保全 80
- ホスト接続項目
 - 設定 58
 - パッケージへの追加 18
- ポリシー管理
 - Windows 2000/XP
 - 管理用テンプレートのインポート 84
 - 実装 83
 - ポリシーの編集 86
 - 管理者権限 83
 - 設定 84

や

呼び出し側ファイル 18

ら

- リモート管理 55
- リモート接続項目
 - 設定 58
 - パッケージへの追加 18
- レジストリキー 18
- ログオンスクリプト
 - Novell NetWare ネットワークでの配備 52
 - Windows ドメインでの配備 49
 - テスト 51、54